[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　　　宰主　上田啓之

論語集註　後藤点　　  
  
   
此篇多評弟子賢否。凡二十五章。胡氏曰此篇記閔子騫言行者四。而其一直稱閔子。疑閔氏門人所記也。  
此の篇多く弟子の賢否を評す。凡て二十五章。胡氏が曰く、此の篇閔子騫の言行を記すは四つ。而して其の一は直に閔子と稱す。疑ふらくは閔氏門人記す所ならん。  
■皇侃は、「先進は此の篇弟子業を進受する者の先後を明らかにす。前に次ぐ所以は、既に鄉黨に還りて教ふ。則ち業を進受すは、宜しく先後有り。故に先進は鄉黨に次ぐ」とした。■邢昺は、「前篇は夫子鄉黨に在りて、聖人の行を論ず。○此の篇は弟子、賢人の行、聖賢相次、亦其の宜を論ず」とした。

○　子の曰はく、先進の禮樂に於る、野人なり。後進の禮樂に於るは、君子なり。先進後進、猶言前輩後輩。野人、謂郊外之民。君子、謂賢士大夫也。程子曰、先進於禮樂、文質得宜、今反謂之質朴、而以爲野人。後進之於禮樂、文過其質。今反謂之彬彬、而以爲君子。蓋周末文勝。時人之言如此、不自知其過於文也。先進後進は、猶前輩後輩と言ふがごとし。野人は郊外の民を謂ふ。君子は賢士大夫を謂ふ。程子の曰く、先進の禮樂に於るは、文質の宜しきを得たり。今反りて之を質朴なりと謂ひて、而して以て野人と爲す。後進の禮樂に於るは、文其の質に過ぎたり。今反りて之を彬彬たりと謂ひて、而して以て君子と爲す。蓋し周の末ゑ文勝つ。時人の言此の如し。自ら其の文に過ぐことを知らず。  
■何晏は、「孔安国曰く、先進後進は仕の先後輩を謂ふ。禮樂は世に因りて損益す。後進は禮樂と俱に時の中を得。斯れ君子。先進は古風有り。斯れ野人なり」とした。■皇侃は、「此れ孔子、將に淳に還り素に反り古を重じ今を賤しまむとす。故に禮樂に君子と野人の異有あり。先進後進は先後輩人を謂ふ。先輩は五帝以上を謂ふ。後輩は三王以還を謂ふ。禮樂に進すは、其れ時の輩人禮樂に進行する者を謂ふ。野人の質朴の稱なり。君子は會時の目なり。孔子の言。今人文を以て古を觀る。古は質而して今は文。文は則ち能く時の中に隨ふ。此の故に當世の君子と為す。質は則ち朴素而して俗に違ふ。此の故に當世の野人と為す。―　時淳は則ち禮樂を損ふ。時澆則ち禮樂を益す。若し益を以て損を觀れば、損は則ち野人と為す。若し損を以て益を行はば、益は則ち君子と為す。―　此れ謂ふは、益を以て益を行ふ。倶に時中を得。故に君子と為すと謂ふ。―　今を以て昔を觀れば、則ち古風有り。古を以て今に比ぶ。故に野人と為す」とした。■邢昺は、「此の章孔子其の弟子の中仕進する先後の輩を評す」、「先進は先輩仕進の人を謂ふ。禮樂に準ずこと、世の損益に因ること能はず。而して古風有り。故に樸野の人と曰ふ」、「後進は後輩仕進の人を謂ふ。禮樂に準ずこと、能く時に因りて損益し、禮樂と俱に時の中を得る。故に君子の人と曰ふ」とした。  
　如し之を用ふは、則ち吾先進に從はん。用之謂用禮樂。孔子旣述時人之言、又自言其如此。蓋欲損過以就中也。之を用ふは、禮樂を用ふを謂ふ。孔子旣に時人の言を述す。又自ら其れ此の如く言ふこと、蓋し過ぐるを損（へら）して以て中に就くことを欲す。  
■何晏は、「將に風を移し俗を易へて、之を淳素に歸せんとす。先進は猶古風に近し。故にこれに從ふ」とした。■皇侃は、「如は猶若なり。先後二時を比方して用ひ教と為す若し。則ち我は先進に從ふ者なり。然りとなす所以は、古を純素と為す。故に從ひ式す（手本とする）可し。―　先進は三王に比し乃ち古と為す。結繩に比し則ち今と為す。故に、近古と云ふ」■邢昺は、「言ふは、如し其れ之を用ひ治を以為はば、則ち吾は先輩樸野の人に從ふ。夫子の意は、將に風を移し俗を易へ、之を淳素に歸す。先進は猶近古の風のごとし。故に之に從ふ」、「（孔安国が）“ 孔曰”より “人也”に至り注す。○正義（邢昺）曰く、 “先進後進は仕の先後輩を謂ふ”と云ふは、下章に云ふ“陳蔡に我に從ふ者は、皆門に及ばず”。謂ふは、仕進の門に及ばず、則ち此れ陳蔡に從はずして仕進を得る者を謂ふ。蓋し先進は、襄（公）昭（公）の世に當り、後進は、定（公）哀（公）の世に當る。 “禮樂は世に因りて損益す”と云ふは，『為政篇』に云ふ、“殷は夏禮に因り、損益する所知る可し。周は殷禮に因り、損益する所知る可し”又、周初則ち禮樂盛にして、周衰則ち禮樂衰ふ。是禮樂は世に因り損益すなり。 “後進は禮樂と俱に時の中を得。斯れ君子”と云ふは、禮樂世に隨ひて盛衰すを言ふ。後進は時と消息し、皆中して時に當る。故に君子と為す。 “先進は古風有り。斯れ野人なり”と云ふは、先輩仕進の人を言ふ。今に比して則ち猶淳素を尚とすがごとし。故に “斯れ野人なり也”と云ふ」とした。  
  
○　子の曰はく、我に陳蔡に從ふ者は、皆門に及ばず。從去聲。○孔子嘗厄於陳蔡之閒。弟子多從之者。此時皆不在門。故孔子思之。蓋不忘其相從於患難之中也。從zòngは去聲（陪從する）。○孔子嘗て陳蔡の閒に厄（くる）しむ。弟子、之に從ふ者多し。此の時皆門に在らず。故に孔子之を思ふ。蓋し其の患難の中に相從ふを忘れず。  
■何晏は、「鄭玄曰く、言ふは、弟子の我に從ひて陳蔡に厄せる者は、皆仕進の門に及ばず。而して其の所を失す」を引いた。■皇侃は、「孔子、時世の亂離すを言ふ。唯、我が道行はれずに非ず。只我が門徒、我に經從し陳蔡に在る者は、亦、時に失ふ。復、仕進の門に及ばず。張憑（呉人、東晋司徒長史）曰く、道の行はれざるは命なり。唯、聖人時に安んじ處し（落ち着いて）從ふ。故に、通塞（前途が開けること閉じること）に期せず。然り陳蔡に我に從ふ者、何ぞ能く窮達を以て心と為さんや。故に、天地に將に君子の道消え閉じるを感じ、而して二三子、開泰の門に及ばずを恨む」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、弟子の所を失すを閔（うれ）ふ。言ふは、弟子、我に從ひ陳蔡に厄す者は、皆仕進の門に及ばずして其の所を失ふ」とした。■不及門。伝統的には仕進の門に及ばず、官職に就く機会を失ったとした。朱熹は、その時の弟子はすべて官職に就き、今は誰もその門に居ないとした。、  
　德行には、顏淵･閔子騫･冉伯牛･仲弓。言語には、宰我･子貢。政事には、冉有･季路。文學には、子游･子夏。行去聲。○弟子因孔子之言、記此十人、而幷目其所長、分爲四科。孔子敎人、各因其材、於此可見。○程子曰、四科乃從夫子於陳蔡者爾。門人之賢者、固不止此。曾子傳道而不與焉。故知十哲世俗論也。行は去聲。○弟子孔子の言に因りて、此の十人を記して、幷せて其の長ずる所を目［なづけ］て、分けて四科と爲す。孔子の人を敎うること、各々其の材に因ること、此に於て見る可し。○程子曰く、四科は乃ち夫子に陳蔡に從いし者のみ。門人の賢者、固より此に止まらず。曾子は道を傳えて與らず。故に十哲は世俗の論なるを知る、と。  
■皇侃は、「此の章、初めに子曰無きは、是記者書す所。孔子印可すに竝び從ひて論中に錄して在あり」、「孔子の門徒三千。而るに唯此れ以下十人名有りて四科と為す。四科は徳行なり、言語なり、政事なり、文學なり。徳行は人生の本を為す。故に、第一と為し以て初に冠す。而して顏閔及び二冉合せて其れ名す。王弼曰く、此の四科は各（おのおの）其の舉其の才長ず。顏淵は徳行の俊、尤もこれを兼る。范寧（晋339年－401年春秋穀梁伝集解）曰く、徳行は百行の美を謂ふ。四子は倶に徳行の目に在ると雖も、而るに顏子其の冠を為す」、「第二科なり。宰我及び端木の二人が其の目に合ふ。范寧曰く言語は賓主相對の辭を謂ふ」、「第三科なり。冉仲二人が其の目に合ふ。范寧曰く、政事は治國の政を謂ふ」、「第四科なり。言偃及び卜商の二人が其の目に合ふ。范寧曰く、文學は善き先王の典文を謂ふ。王弼（魏226年－249年）曰く、弟子の才、徒（ただ）に十にあらず。蓋し其の美を舉ぐは以て業の分名を表はす。其の餘は則ち各長ず所を以て四科の品に從ふ。侃案ずに、四科の次第に徳行を立て首と為す。乃ち可解と為す。而して言語を次と為すは、言語は君子の樞機（肝要）、徳行の急と為す。故に徳行に次ぐ。而して政事は是れ人事の別。言語に比べ緩と為す。故に言語に次ぐ。文學は古文に博學なることを指す。故に三事に比べ泰と為す。故に最後なり」とした。■邢昺は、「此の章、前章に弟子の失す所、仕進に及ばずを言ふに因りて、遂に弟子の中、才德尢も高く仕進す可き人を舉ぐ。鄭氏は以て前章と合す。皇氏は別に一章と為す。言ふは、德行を任用すが若（ごと）きは、則ち顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓が四人有り。其の言語辨說、以て行人と為し、四方に適（ゆ）かしむ若きは、則ち宰我、子貢が二人有り。政事を治理し、決斷不疑が若きは、則ち冉有、季路が二人有り。文章博學が若きは、則ち子遊、子夏が二人有り。然るに夫子門徒三千、達す者は七十有二。而るに此の四科唯舉ぐ十人は、但に其の翹楚（ぎょうそ、高く抜きんでる）者を言ふのみ。或る時、陳に在りてこれを言ふ。唯從ふ者を舉ぐ。其れ從はざる者、才德有りと雖、亦、及ばずと言ふ」とした。  
  
○　子の曰はく、囘は我を助くる者に非ず。吾が言に於て、說ばざる所無し。說音悦。○助我、若子夏之起予。因疑問而有以相長也。顏子於聖人之言、默識心通、無所疑問。故夫子云然。其辭若有憾焉、其實乃深喜之。○胡氏曰、夫子之於囘、豈眞以助我望之。蓋聖人之謙德、又以深贊顏子云爾。說yuèは音悦。○我を助くは、子夏の予を起こすが若し。疑問に因りて而して以て相長ずこと有り。顏子の聖人の言に於る、默識して心通ず。疑問する所無し。故に夫子然（しか）云ふ。其の辭は憾（うら）むること有るが若し。其の實、乃ち深く之を喜ぶ。○胡氏が曰く、夫子の囘に於る、豈に眞に我を助くるを以て之を望まんや。蓋し聖人の謙德、又以て深く顏子を贊すと爾（しか）云ふ。  
■何晏は、「孔安国曰く、助は益なり。言ふは、回は言を聞きて即ち解す。已を發起增益す可きこと無し」を引いた。■皇侃は、「聖人教を為す。須べからく賢を啓發す。游參の徒は、言を聞きて輒（すなは「その都度」）ち問ふ。是、我を助益し以て曉導を増す。顏淵嘿識す。言を聞きて說び解す。嘗て我に口諮せず。教化して益無し。故に、我を助く者に非ずと云ふ。吾において言、說ばざる所無し。―　孫綽曰く、毎く吾が言を說ぶ所以。理自ら玄同（彼我の別なし）のみ。我を助為くに非ず。言ふは、此れ眾を曉（さと）し且つ理を明らかにすを以てすを欲す」とした。■邢昺は、「此の章、顏回の賢を稱す。助は益なり。說は解なり。凡そ師資（師匠と弟子）の問答は、相ひ發起すを以てす。子夏と『詩』を論ずが若し。子の曰はく、“予を起すは商なり”。此の如き、是已に益有り。今、回や、已に益增す者に非ず。其れ吾の言ふ所を以て、皆て默してこれを識り、解せざる所無し。言ふは、回は言を聞きて即ち解す、已を發起增益する所無し」とした。■助の且は鋤（すき）、力は耒（すき）の象形、その両者を併せて助耕すること（字統）。說は言と兌（神意を承けてよろこぶさま）からなる。顔回は師の言を聞いて、その意に疑を抱くでなし、確認するでなし、兌すのみ。  
  
○　子の曰はく、孝なるかな閔子騫。人其の父母昆弟の言を閒（かん）せず。閒去聲。○胡氏曰、父母兄弟稱其孝友、人皆信之、無異詞者、蓋其孝友之實、有以積於中而著於外。故夫子歎而美之。閒jiànは去聲（隔たりのあること）。○胡氏曰く、父母兄弟の其の孝友を稱す。人皆之を信じて、異詞無きは、蓋し其の孝友の實、以て中に積みて而して外に著はること有り。故に夫子歎じて之を美（よみ）す。  
■何晏は、「陳羣（？～236、劉備の後、曹操に仕へる）曰く、言ふは、子騫、上（かみ）は父母に事（つかふまつ）り、下（しも）兄弟に順なり。動靜は善を盡す。故に人、間の言に非ざること有るを得ず」を引いた。■皇侃は、「間は猶非のごとし。昆は兄なり。兄を謂ひて昆と為す。昆は明なり。尊してこれを言ふ。言ふは、子騫は至孝、父母兄弟に事り美善に盡す。故に凡て人物、子騫に閒に非ざる言有ること無き者と論ず。故に顏延之（384～456、東晉及南朝宋文人）云く、言の閒無きを美を盡すと謂ふ」とした。■邢昺は、「此の章、閔子騫の孝行を歎美す。昆は兄なり。間は間廁を毀つこと非ずを謂ふ。言ふは、子騫、上は父母に事り、下は兄弟に順す。動靜善を盡し、故に、人、間に非ざる言有ることを得ず」とした。■「二十四孝」、「閔子騫」に、「閔氏賢郎有り 何ぞ曾て晩娘を怨ず 尊前に母を留て在り 三子風霜を免る」、「閔子騫（びんしげん）いとけなくして 母を失へり。父また妻をもとめて、二人（ふたり）の子をもてり。彼の妻、我子を深く愛して繼子（まゝこ）を惡み、寒き冬も蘆（あし）の穗を取りて、著る物に入れて著せ侍るあひだ、身も冷えて堪へかねたるを見て、父、後の妻を去らんとしければ、閔子騫がいふやうには、彼の妻を去りたらば、三たりの子寒かるべし、今われ一人寒きをこらへたらば、弟の二人（ふたり）はあたゝかなるべしとて、父を諌めたるゆゑに、これを感じて繼母（けいぼ）も後（のち）には隔てなく慈（いつく）しみ、もとの母とおなじくなれり。只人のよしあしはみづからの心にありと、古人の言ひ侍りけるも、ことわりとこそ思ひ侍る。（[有朋堂文庫『御伽草紙』より](http://www.geocities.jp/sybrma/378nijuushikou.html)）」とある。人とは子騫の周辺の他人。後藤点では、不間とするが、通例、人其の父母昆弟を閒（かん）する言あらず、と訓じられる。閒言は古語で「そしる」「悪く言ふ」ことであり、子騫周辺の人々も父母昆弟をそしるようなことを言はないとする。子騫は、その言を発する父母昆弟の気持ちの根底にあるものを素直に汲み取り、心を通ひ合はせることができたのでしょう。父母が子騫の孝を称へ、兄弟が子騫の友（兄として弟を慈しむ）を称へ、周辺の人まで感化された。孝なる哉、と孔子が称された。  
  
○　南容白圭を三復す。孔子其の兄の子を以て之に妻（めあ）はす。三妻竝去聲。○詩大雅抑之篇曰、白圭之玷、尙可磨也。斯言之玷、不可爲也。南容一日三復此言。事見家語。蓋深有意於謹言也。此邦有道、所以不廢、邦無道、所以免禍。故孔子以兄子妻之。○范氏曰、言者行之表、行者言之實。未有易其言而能謹於行者。南容欲謹其言如此、則必能謹其行矣。三sàn妻qìは竝びて去聲。○詩は大雅、抑の篇に曰く、白圭の玷（かけ）たるは、尙磨くべし。斯の言の玷たるは、爲（おさ）む可からず。南容一日に此の言を三復す。事、家語に見えたり。蓋し深く言を謹むに意有り。此れ邦道有れば廢（はい）せざる所以、邦道無んば禍を免る所以なり。故に孔子兄の子を以て之に妻はす。○范氏が曰く、言は行の表、行は言の實なり。未だ其の言を易（やす）くして而して能く行を謹む者は有らず。南容の其の言を謹まんと欲すること此の如くんば、則ち必ず能く其の行を謹まん。  
■何晏は、「孔安国曰く、『詩』に云く、“白圭の玷たる尚磨く可し。斯の言の玷たる為む可らず（白圭は欠ければ磨いて元通りにできるが、言の欠けたものはとりかえしがつかない）”。南容『詩』を讀みて此に至り、三たびこれを反覆す、是れ其の心慎む言なり」を引いた。■皇侃は、「復は猶反のごとし。詩に云く、『白圭之玷。尚可磨也。斯言之玷。不可為也』。是れ白圭に玷缺有り。尚磨治して其の全を好からしむ可し。若し人の言に忽に瑕玷有れば、則ち駟馬も及ばず。故に為む可からずと云ふ。南容、言語を愼む。詩を讀みて白圭の句に至る。乃ち三たび過ぎて反覆す。翫（慢心）を修め無已の意なり」、「南容の孔子の姻を蒙（かふむ）るを重ねて明らかにす。其の善一つに非ず。故に更にこれを記す。苞み述べて云く、南容深く白圭を味ふ。志無玷に擬（なぞら）ふ。豈に縲紲非罪（縲絏の中に在りと雖も、其の罪に非ず、公冶長篇）と同じく其の流を致さずや。猶夫子の情、實（まこと）に深く天に屬（つ）くがごとし。義を崇（たか）くし教を弘む。必ず親より始む。二つを觀るに已に釋有り。公冶長の篇中に在り」とした。■邢昺は、「此の章、南容言を慎むを美（ほ）む。複は覆なり。『詩』に云く、“白圭之玷、尚可磨也。斯言之玷、不可為也”。南容『詩』を讀みて此に至り、三たびこれを反覆す。是れ其の心慎む言なり。孔子其の賢を知る。故に其の兄の女子を以てこれに妻はす。此れ即ち『邦に道れば廢（すて）られず。邦に道無くば刑戮を免る者』なり。弟子各聞く所を記す。故に又これを載す。○ “『詩』云：白圭之玷、尚可磨也。斯言之玷、不可為也”を注す。此れ『大雅·抑篇』刺厲王の詩なり。『毛傳』に云く、“玷は缺なり”。箋に云く、“斯は此なり。玉の缺は尚磨鑢して平にす可くも、人君は政教を一たび失はば、誰か能くこれを反覆すや？”意を言ふは、教令は尢も謹慎須べし。白玉を圭と為す。圭に損缺有れば、猶ほ尚ほ更に磨鑢して平に可べくも、若し此の政教や言語に缺失有れば、則ち遂に往きて改む可らず。王者為るには、安危は出令に在り、故に特に宜しくこれに慎む。是れ詩、人、其の慎言を戒しむ。南容の心、亦、慎言を欲す。故に、三たび覆して此を讀む」とした。  
  
○　季康子問ふ。弟子孰か學を好むことを為す。孔子對へて曰はく、顏囘なる者有り、學を好む。不幸短命にして死す。今は則ち亡し。好去聲。○范氏曰、哀公･康子問同而對有詳略者、臣之告君、不可不盡。若康子者、必待其能問乃告之。此敎誨之道也。好hàoは去聲。○范氏が曰く、哀公と康子と問ふこと同じくして對へに詳略有るは、臣の君に告ぐるは、盡くさずんばある可からず。康子が若きは、必ず其の能く問ふを待ちて乃ち之に告ぐ。此れ敎誨の道なり。  
■皇侃は、「孫綽曰く。（当然）生かざるにして生くを幸と為し、（当然）死せざるにして死ぬを不幸と曰ふ。侃の謂へらく、此と哀公の問ひとは同じ（雍也編）。而して答の異なるは、舊に二通有り。一（ある）に云く。哀公に「怒りを遷（うつ）し過（あやまち）を貳（ふたたび）す」の事有るに緣（よ）る。故に孔子、答に因りて以てこれを箴（いまし）む。康子に此の事無し。故に言を煩はさず。又、一に云く。哀公は是れ君の尊。故に具（つぶさ）に答ふべし。而るに康子は是れ臣、卑と為す。故に略（はぶ）きて以て相ひ酬（おう）ず。故に江熙曰く。此と哀公の問ひとは同じ。哀公、以て賞す無きと雖も、對（こたへ）を極（きは）むを要す。康子に至りては則ち其の所を量（はか）りて及び而して答ふ可し」とした。■邢昺は、「此の章、顏回の學を好むを稱す。季康子は魯の執政大夫。故に言氏稱對。此と哀公の問ひとは同じ、而して答異なるは、哀公の「遷怒貳過」を以てす。故に答に因りて以てこれを諫む。康子にこれ無し、故に云はず。」  
  
○　顏淵死す。顏路、子の車以て之が椁を爲さんと請ふ。顏路淵之父、名無繇。少孔子六歳。孔子始敎而受學焉。椁外棺也。請爲椁、欲賣車以買椁也。顏路は淵の父、名は無繇（ぶゆう）。孔子より少（わか）きこと六歳。孔子始めて敎へて學を受（さず）く。椁は外棺なり。椁を爲さんと請ふは、車を賣りて以て椁を買はんと欲す。  
■何晏は、「孔安国曰く、顏路は顏淵の父なり。家貧し、孔子之車を請ひて賣りて以て槨を作らんと欲す」を引いた。■皇侃は、「顏路は顏淵の父なり。淵の家貧し。死して槨無し。故に其の父、就（すなはち）孔子に車を請ひ、賣りて以て槨を營さんとす。―　繆協曰く、顏路の家貧し。以て禮に備ふこと無し。而るに顏淵の徳美、聖師に稱す。喪予の感、これを痛むこと愈（いよいよ）深し。二三子の徒將に其の禮を厚くす。路、情に卒（せか）れて行ふ。未だ允（まこと）ならざること有るを恐る。而して未だ制義の輕重審かならず。故に、車を請ひて以て聖教を求むを託す」とした。■邢昺は、「此れ三章並びて顏回死時の孔子の語を記す。路は顏淵の父なり。家貧し、孔子の車を請ひ賣りて以て槨を作らんと欲（す）」とした。　子の曰はく、才も不才も、亦各々其の子と言ふ。鯉や死す、棺有りて椁無し。吾徒行して以て之が椁を爲さず。吾が大夫の後（しりへ）に從へるを以て、徒行す可からずんばなり。鯉孔子之子伯魚也。先孔子卒。言鯉之才、雖不及顏淵、然己與顏路以父視之、則皆子也。孔子時已致仕、尙從大夫之列。言後謙辭。○胡氏曰、孔子遇舊館人之喪、嘗脱驂以賻之矣。今乃不許顏路之請何耶。葬可以無椁、驂可以脱而復求。大夫不可以徒行、命車不可以與人而鬻諸市也。且爲所識窮乏者得我、而勉強以副其意、豈誠心與直道哉。或者以爲、君子行禮、視吾之有無而已。夫君子之用財、視義之可否、豈獨視有無而已哉。鯉は孔子の子伯魚なり。孔子に先だちて卒す。言ふは、鯉の才、顏淵に及ばずと雖も、然れども己と顏路と父を以て之を視れば、則ち皆子なり。孔子時に已に致仕す。尙大夫の列に從ふ。後と言ふは謙の辭。○胡氏が曰く、孔子舊館人の喪に遇ひて、嘗て驂（さん、外側の馬二頭）を脱（と）きて以て之に賻（ふ、贈って葬儀を助く）す。今乃ち顏路の請を許さざるは何ぞや。葬は以て椁無く可けん。驂は以て脱きて復求む可し。大夫は以て徒行す可からず、命車は以て人に與へ而して諸市に鬻（ひさ）ぐ可からず。且つ識る所の窮乏の者我に得るが爲に、勉強して（勉め強ひて）以て其の意に副（そ）ふ。豈に誠心、直道與（より）ならんや。或者以爲へらく、君子、禮を行ふこと、吾これ有無を視るのみ。夫れ君子の財を用ふは、義の可否を視れば、豈に獨り有無を視るのみならんや。  
■何晏は、「孔安国曰く、鯉は孔子の子、伯魚なり。孔子時に大夫為り。言ふは、大夫の後に從ふ、以て徒（かち）より行く可からずと。謙の辭なり」を引いた。■皇侃は、「孔子將に車を以てこれに與へず。故に先に此を説き以てこれを拒む。才は顏淵を謂ふ。不才は鯉を謂ふ。言ふは、才と不才とは誠に當に異有るべし。各（おのおの）の本天屬の若し。其の父に於ては則ち同じく是れ其の子なり」、「既に天屬各深し。昔し我が子死す。我自ら車有り。尚、これを賣りて槨を營さず。今汝が子死す。寧（なん）ぞ我の車を請（こ）はんと欲（す）や。繆協曰く、子、才と雖も貧にして備ふを求む可らず。不才と雖も而して豐儉（豊かであらうとつつましやかであらうと）、亦、各禮有り。これを制すは父に由る。故に鯉死すや而して槨無し」、「又、鯉の為に槨を作らぬ由の所以を解く。徒は猶步のごとし。言ふは、我、車を賣りて步行し子の為に槨を作ることせず」、「又、步行せざる意を解く。言ふは、大夫の位爵已に尊し。步行す可らざる故なり。然り實に大夫為り。而して大夫の後に從ふと云ふは、孔子の謙なり。猶今の人府國官と為す。而して府末國末に在りと云ふ。江熙曰く、徒行す可からず。距の辭なり。可なれば則ち與ふ。故に仍ち左驂を脱きて舊館人に賻す。不可なれば則ち距す。故に路に請ふを許さず。鯉や槨無し。將にこれを悟るを以て且つ厚葬を塞く」とした。■邢昺は、「此れ親を舉げて疏を喻す。言ふは、淵は才、鯉は不才異ると雖も、亦、各其の子と言ふは則ち同じ。我が子の鯉が死せる時、但に棺有るのみ。家貧しきを以て槨無きも、吾は車を賣り以て槨を作ることなし。今女（なんじ）が子死すも、安んぞ得て我が車を賣りて以て槨を作らんか？“吾大夫の後に從ふを以て、徒行すべからず”は、此れ車を賣りて槨を作る可からずの由を言ふ。徒行は步行なり。吾大夫為るを以て、徒行す可からざる故なり。孔子、時に大夫為り、大夫の後に從ふと言ふは、謙辭なり。○ “ 孔曰”より “辭也”に至りて注す。○正義（邢昺）曰く、 “鯉，孔子之子，伯魚也”と云ふは、『世家』の文なり。“孔子時為大夫，言從大夫之後，不可以徒行，謙辭也”と云ふは、案ずに、『孔子世家』“定公の十四年、孔子、年五十六、大司寇に由りて相事を攝行す。”魯は齊の女樂を受け、三日聽政せず。孔子、遂に衛に適く。宋、鄭、陳、蔡、晉、楚を曆至し、魯を去ること凡そ十四歲而して反へらんか魯に。然るに魯終（つひ）に用ふこと能はず。孔子、亦、仕ふを求めず。哀公十六年を以て卒ず、年（よはひ）七十三。今、案ずに、顏回は孔子に少（わか）きこと三十歲、三十二にして卒す\*。則ち顏回が卒時、孔子の年は六十一。方は陳、蔡に在り。伯魚が年は五十、孔子の先に死す、則ち鯉や死せる時、孔子が蓋し年七十左右（前後）、皆大夫の位在る時に非ず。而るに此の注に “時に大夫為る”と云ふは、未だ何（いづく）に據とする所有るかを知らず。杜預（とよ、222－284年、西晋、「春秋経伝集解」を著す）曰く、“嚐（かつ）て大夫為りて去る。故に後と言ふなり”。其の年に據れば、則ち顏回は。伯魚に先に卒す。而るに此に云ふ顏回の死、顏路、子の車以て之を槨と為すを請ふ。子の曰はく、“鯉や死せり、棺有りて槨無し”。又、伯魚先に死す者に似たり。王肅の《家語》の注に云く、“此の書久しく遠く、年數錯誤す。未だ詳（つばひらか）にす可からず”。或（あるひと）假設の辭と以為（おも）ふ。徒は猶空のごとし。車無く空で行くを謂ふ。是れ步行、これを徒行と謂ふ。故に『左傳』、襄元年に“鄭の徒兵、洧上に敗る”，杜注に云く、“徒兵は步兵なり。”」  
　\*顔回、BC521―BC490説により、顔回が孔鯉より先に、諸国放浪の途に亡くなったことになる。BC521―BC481であるなら、魯に帰国後、孔鯉の後も成立せしめられる。■孔子の嘆きは深く、弟子達の顔回への哀惜も深かった。以下、天が予を喪す、子慟すなど孔子は礼に反す行動をとっていた。弟子達も格別の思いがあり、孔子は厚く彼を葬むることに同意されるであろうとみていたのかもしれない。しかし、子貢あたりが、孔子の意向を確かめよと、顔路に孔子の車を請はしめたのかもしれない。孔子は単に「礼に反す」だけでは意が伝はらぬと思ひ、我が子のことを持ち出して止めさせたのではあるまいか。  
  
○　顏淵死す。子の曰はく、噫（い）、天予を喪（ほろぼ）せり、天予を喪ぼせり。喪去聲。○噫、傷痛聲。悼道無傳、若天喪己也。喪sàngは去聲。○噫は傷痛の聲。道傳ふこと無きを悼む。天己を喪ぼすが若し。  
■何晏は、「包氏曰く、噫は痛傷の聲」、「天予を喪せりは、已を喪すが若し。再びこれを言ふは、痛惜の甚しき」を引いた。■皇侃は、「噫は痛傷の聲なり。淵死す。使を遣はし孔子に報ず。孔子これを傷痛す。故に噫と云ふ」、「喪は猶亡のごとし。予は我なり。夫れ聖人世に出れば、必ず賢が輔（ほ）須（す）べし。天將に雨を降らすに必ず先ず山澤に雲出だすが如し。淵未だ死せずんば、則ち孔の道猶冀（こ）ふ可し。縱（よし）や君たらずども、則ち亦、共に教化為（す）を得。今淵既に死せり。是孔の道亦亡ぶ。故に、天我を喪せりと云ふ。劉歆（?～23年頃、前漢、古文経学派の祖）曰く、顏は是れ亞聖人の偶。然らば則ち顏と孔とは自然の對物。一氣の別形。玄妙藏寄する所以。道の旨は讚明\*に由る所。顏淵に死を敍（さづ）くは則ち夫子の體缺けたり。故に曰く、天予を喪せり。噫は諒（まこと）に卒す實の情。過痛の辭に非ず。將に聖賢の域を求む。宜しく自ら此れこれを覺（さと）る。繆播（？-309年、西晋）曰く、夫れ竿を投げて深さを測る。安んぞ江海の懸（へだたり）有るを知るや。何者か倶に其の極を究めざるや。是れ西河の人疑ひて子夏を夫子と為すを以て、武叔は子貢を仲尼より賢とす。斯れ其の類に非ずや。顏回盡形す（其の形体寿命を尽す）。形外は神。故に孔子、理、回に在るを知る。淵を知るは、亦、唯孔子のみ」とした。■邢昺は、「噫は痛傷の聲」、「孔子、顏淵が死を痛惜す。天已を喪せりと言ふが若し。再びこれを言ふは、痛惜の甚しき」とした。\*讚明は、「易」に、「道は垂訓し後に嗣ぐ、以て法式と為す」とある。また、彰明を佐助す、ともあり、聖人とそれを輔佐する賢人。  
  
○　顏淵死す。子之を哭して慟す。從者の曰く、子慟す。從去聲。○慟哀過也。從zòngは去聲。○慟は哀の過ぎたるなり。  
■何晏は、「馬融曰く、慟は哀の過るなり」を引いた。■皇侃は、「顏淵死すを謂ふ。孔子、顏家に往きてこれを哭す。慟は哀の甚しきを謂ふ。既に己を喪ふが如し。慟す所以なり。郭象（かくしょう、252 - 312年、西晋玄学家）が曰く。人哭し、亦、哭す。人慟し、亦、慟す。蓋し情無くば物と化すなり。繆協が曰く、聖人體無く哀樂す。而して能く哀樂を以て體を為す。過を失せず」、「從者は諸の弟子を謂ふ。孔子に隨ひて顏淵が家に往く。孔子の哀甚しきを見ること有り。故に、子慟すと云ふ」とした。■邢昺は、「慟，過哀也。言夫子哭顏淵，其悲哀過甚」、「從者，眾弟子。見夫子哀過，故告曰」。  
　曰く、慟すること有るか。哀傷之至、不自知也。哀傷の至、自ら知らず。  
■何晏は、「孔安国曰く、自ら已の悲哀過るを知らず」を引いた。■皇侃は、「孔子、自ら慟すを知らず。故に、これ慟すこと有るかと問ふ」とした。■邢昺は、「時に夫子、自ら已が悲哀過ぐを知らず。故に答へて曰く、慟すこと有か、と」した。  
　夫の人の爲に慟するに非ずして誰が爲にせん。夫音扶。爲去聲。○夫人謂顏淵。言其死可惜、哭之宜慟。非他人之比也。○胡氏曰、痛惜之至、施當其可。皆情性之正也。夫fúは音扶。爲wèiは去聲。○夫の人は顏淵を謂ふ。言ふは、其の死惜しむ可し。之を哭して慟す宜し。他人の比（くらぶ）に非ず。○胡氏が曰く、痛惜の至り、施すこと其の可に當たる。皆（すべて）情性の正なり。  
■皇侃は、「初め既に自ら知らず。又、諸の弟子に向ひて、慟す所以の意を明らかにす。夫人は顏淵を指す。言ふは、若し顏淵が為に哀慟せずんば、誰が為に應ぜんや。慟す事を言ふ」とした。■邢昺は、「弟子が已悲哀過ぐこと甚しと言ふに因りて、遂に已が哀に過ぎたること亦理に當り、失に非ずを說く。夫人は顏淵を謂ふ。言ふは、顏淵、これを哭す為に慟せずんば、更に誰が人の為に慟すか？」とした。■夫の人の爲に非ずんば、慟すこと、誰が爲にせん、と訓じたい。  
  
○　顏淵死す。門人厚く之を葬らんと欲す。子の曰はく、不可。喪具稱家之有無。貧而厚葬、不循理也。故夫子止之。喪の具は家の有無に稱（かな）ひて、貧にして厚く葬るは、理に循はざる。故に夫子之を止む。  
■何晏は、「禮に貧富各（おのおの）宜しき有り。顏淵家貧しく門人厚くこれを葬（はぶら）んと欲す。故に聽（ゆる）さず」とした。■皇侃は、「顏淵の門徒。師の貧を見るのみ、厚くこれを葬んと欲す。一に云く、是れ孔子の門人厚く朋友を葬んと欲す」、「孔子、門人の厚葬を止む。故に、不可と云ふ。王弼（おうひつ、226-249年、魏晋玄学家）が曰く。財有りて死せば則ち禮有り。財無くば則ち已のみ。既にして禮備はれば則ち厚葬に近し。故に、孔子、聽さずと云く」とした。■邢昺は、「門人は顏淵の弟子。其の師賢行有るを以て、故に其の禮を豐厚に以てこれを葬んと欲す」とした。  
　門人厚く之を葬る。蓋顏路聽之。蓋し顏路之を聽（ゆる）す。  
■皇侃は、「孔子の言に從はず。范寧（はんねい、339-401年、著「春秋穀梁俸集解」、儒家）が曰く。厚葬は禮に非ず。故に許さず。門人厚葬を欲すは何ぞ。緣回が父に厚葬の意有り。故に、遂に門人の深情を欲す」とした。■邢昺は、「禮に貧富に宜しき有り。顏淵貧し、而して門人厚葬を欲す。故にこれを聽さず。不可と曰ふ」とした。  
　子の曰はく、囘が予を視ること猶父のごとし。予猶子のごとく視ること得ざる。我には非ず。夫の二三子なり。歎不得如葬鯉之得宜、以責門人也。鯉に葬むるごとくするの宜しきを得るが如きなることを得ざるを歎き、以て門人を責む。  
■何晏は、「馬融曰く、言ふは、回自ら父有り。父の意門人の厚く葬るを聽んと欲す。我制止することを得ず。其の厚く葬ることに非ず。故に云ふのみ」とした。■皇侃は、「回の我に事（つかふま）つること在三如一（父であり、師であり、君であるがごとし）。故に、予を視ること猶父のごとしと云ふ。我、鯉を葬るに槨無し。而るに回が槨無きを止むこと能はず。是れ回を視ること猶子のごときを得ず」、「言ふは、此れ貧にして禮に過ぎ厚く葬るは、是れ我が意に非ず。故に是れ夫の二三子が意なり。二三子に則ち顏路、亦、其の中に在り。范寧が曰く、言ふは、回、父を以て我に事つると雖も、我、子を以て回を遇すことを得ず。師徒と曰ふと雖、義天屬を輕んず。今父厚葬を欲す。豈に得て制止すや。言ふは、厚葬我の教に非ず。出ずは、門人の意のみ。此れ以て門人を抑へて世を救すを弊す。猶鄙に薄のごときに非ず」とした。■邢昺は、「初め孔子に谘（はか）る。孔子聽さず。門人故に孔子に違ひて卒すことこれを厚く葬る」、「此の下、孔子其の厚葬の語に非ず。言ふは、回や已に師事し、已を視ること猶其の父の如し」、「言ふは、回自ら父存すこと有り、父の意は門人厚く葬ることを聽さんと欲し、我これを割止（制止）すことを得ず。故に、“予不得視猶子也”と曰ふ」、「言ふは、厚葬の事は、我が為す所に非ず、夫れ門人が二三子これを為す。其の厚葬に非ず、故に云ふのみ」とした。■顔回は実父より孔子に従ったが、喪に関して、孔子は顔回を実父の子と視、結果的に実父の意向を制止しなかったといふ解釈になる。孔子と顔回の関係は、師と弟子、父と子、君と臣という関係を越えた同志のごとき連帯感があったのではないか。優れた人格のある者としての敬意があり、内心では厚葬に値するとしたのではないか。孔子自身の礼に反した反応からもそれが伺へる。  
  
○　季路鬼神に事らんことを問ふ。子の曰はく、未だ人に事ること能はず、焉んぞ能く鬼に事らん。敢へて死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。焉於虔反。○問事鬼神、蓋求所以奉祭祀之意、而死者人之所必有、不可不知。皆切問也。然非誠敬足以事人、則必不能事神、非原始而知所以生、則必不能反終而知所以死。蓋幽明･始終、初無二理。但學之有序、不可躐等。故夫子告之如此。○程子曰、晝夜者、死生之道也。知生之道、則知死之道、盡事人之道、則盡事鬼之道。死生･人鬼、一而二、二而一者也。或言、夫子不告子路。不知此乃所以深告之也。焉yānは於yú虔qiánの反（声が合はない）。○鬼神に事らんことを問ふは、蓋し祭祀に奉ずる所以の意を求む。而して死は人の必ず有る所、知らずんば可からず。皆切問なり。然れども誠敬以て人に事るに足るに非ずんば、則ち必ず神に事ること能はず。始を原（たず）ねて生ずる所以を知るに非ずんば、則ち必ず終に反りて死す所以を知ること能はず。蓋し幽明･始終、初り二理無し。但之を學ぶこと序す有り、等を躐ゆ可からず。故に夫子之を告ぐこと此の如し。○程子の曰く、晝夜は死生の道なり。生の道を知れば、則ち死の道を知る。人に事る道を盡くせば、則ち鬼に事る道を盡くす。死生･人鬼、一にして二つ、二にして一なる者なり。或ひと言く、夫子子路に告げず、と。此れ乃ち深く之に告ぐ所以なることを知らず。  
■何晏は、「陳羣（ちんぐん、～236、魏の政治家、九品官人法を整備）曰く、鬼神及び死の事は明し難く、之を語るに益無し。故に答へず」を引いた。■皇侃は、「外教に三世（過去、現在、未来）の義（三世因果応報）無し。見るや此の句なり。周（公）孔（子）の教は唯だ現在を説く。過去未來を不明とす。而るに子路は此の鬼神に事ることを問ふ。言を政（ただ）せば、鬼神は幽冥の中に在り。其の法何と云ふ。此れ是れ過去を問ふなり」、「孔子言ふは、人に事つること易し。汝尚未だ能はず。則ち何んぞ敢へて幽冥の中を問ふか。故に、焉んぞ能く鬼に事つるやと云ふや」、「此れ又當に（未）來の事を問ふ。言ふは、今曰以後の死事を問ふ復た何を云ふや」、「亦、これに答へず。言ふは、汝尚未だ即ち生の事明し難きを見るを知らず。又焉んぞ能く豫じめ死沒を知るを問ふや。―　顧（ただ）に歡じて曰く、夫れ生くによりて以て善く死す可し。人を盡して以て神に應ふ可し。幽顯は路（みち）を殊（こと）にすと雖も、而るに誠は恆に一なり。苟も未だ此を能くせずして、これを問ふは益無し。何ぞ處しく彼を問ふや」とした。■邢昺は、「此の章、孔子道せずば無益の語を明らかにす。子路、鬼神に事るを問ふは、對ふに則ち天を神と曰ひ、人を鬼と曰ふ。散して則ち人と雖も亦神と曰ふ。故に下文に獨り鬼を以てこれに答ふ。子路、神に事つるを承けて其の理何如を問ふ」、「言ふは、生人尚未だ能くこれに事つらず、況や死者の鬼神、安んぞ能くこれに事つるや」、「子路又曰く、“敢へて人の死の若き、其の事何如を問ふ」、「孔子の言はく、女（なんじ）尚未だ生時の事知らず、則ち安んぞ死後を知るか？皆て子路を抑止する所以。鬼神及び死事明にすること難きを以て、又これを語ること益無し。故に、答へず」とした。■この対話は、子路の認識を正したものではあるまい。あまりにも、ちぐはぐな対応であり、そのことが余程話題となったように思へる。子路が鬼神に事つるを問ふは、彼の性格からして哲学的なものではあるまい。季路としており、孔子が子路を季氏の宰にした時のことと思はれる。鬼神とは季氏の祖廟の祖霊と祖神のことではなかろうか。宰としてどういう心構へで祭祀すべきかを問ふた。孔子の返答が意外であった。自分では今の季氏の大夫すらままならぬ、その鬼神？どうにもならん、と言はんばかりである。子路は、生きている人達じゃなく死んだ人達のことを問うているんですがと転じると、今度は、自分を生かし切れていない、死より自分を生かしきることが先だ、と反（かへ）ってきた。魯に周公の政を復興せんとして空転する孔子。その無力感が吐き出されたような独白に聞こえる。  
  
○　閔子側（かたはら）に侍す。誾誾如（ぎんぎんじょ）たり。子路、行行（こうこうじょ）如たり。冉有･子貢、侃侃如（かんかんじょ）たり。子樂しむ。誾侃音義見前篇。行胡浪反。樂音洛。○行行剛強之貌。子樂者、樂得英才而敎育之。誾侃の音義は前篇に見える。行hàngは胡hú浪làngの反。樂lèは音洛。○行行は剛強の貌。子樂しむは、英才を得て之を敎育することを樂しむ。  
■何晏は、「鄭玄曰く、各其の性を盡すを樂しむ。行行は剛強の貌」を引いた。■皇侃は、「卑者の尊者の側に在（ま）すを侍と曰ふ。此れ明らかに、子騫、孔子に侍り側に座す。誾誾は中正なり。子騫が性は中正なり」、「亦、孔子に侍り側に座す。行行は剛強の貌なり。子路が性は剛強なり」、「此の二人も、亦、側に侍る。侃侃は和樂なり。二子竝びて和樂すなり」、「孔子、四子の各が其の性を極め情を隱す所無きを見る。故に、我も、亦、懽樂（かんらく、歓楽）すなり」とした。■邢昺は、「此の章孔子、四弟子の其の直なる性に任すを喜ぶ」、「卑が尊の側に在すを侍と曰ふ。訚訚は中正の貌。如くなる者は、言ひて其の貌此の如し」、「行行は剛強の貌」、「侃侃は和樂の貌」、「以て四子各其の自然の性を盡す。故に喜樂す」とした。  
　由が若きは其の死然るを得ず。尹氏曰子路剛強、有不得其死之理。故因以戒之。其後子路卒死於衛孔悝之難。洪氏曰漢書引此句、上有曰字。或云上文樂字、卽曰字之誤。尹氏が曰く、子路剛強、其の死を得ざる理有り。故に因りて以て之を戒む。其の後子路卒に衛に孔悝の難に死す。洪氏（洪興祖；1090年－1155年、論語解、楚辞補注）が曰く、漢書に此の句を引きて、上に曰の字有り。或ひと云く、上文の樂の字、卽ち曰の字の誤り。  
■何晏は、「孔安国曰く、得て以て壽を終へず（寿命を全うしない）」を引いた。■皇侃は、「孔子、子路が獨り剛強なるを見る。故に此の言を發す。由は子路が名なり。其の死然るを得ず。謂ふは必ず壽を終へるを得ず。後に果して衞亂に死す。―　袁氏（袁喬、東晋官僚・軍人、論語袁氏注）が曰く、道が直なる、時邪（これや）、自然（おのずから）速禍（招致災禍）」とした。■邢昺は、「然は猶焉のごとし。言ふは、子路が剛を以てす、必ず其れ以て壽を終へるを得ず」とした。  
  
○　魯人（ひと）長府を爲（つく）る。長府藏名。藏貨財曰府。爲蓋改作之。長府、藏の名。貨財を藏すを府と曰ふ。爲は、蓋し之を改め作る。  
■皇侃は、「魯人、魯の君臣、政を為すは、作を為す。長は藏の名。魯人、政を為し、更に長府を造作す」。■邢昺は、「此の章、民を勞すに重し」、「財貨を藏すを府と曰ふ。長は其の藏の名。為は作なり。言ふは、魯人新たにこれを改め作る」とした。  
　閔子騫が曰く、舊貫に仍（よ）らば、之を如何（いかん）。何ぞ必ずしも改め作らん。仍因也。貫事也。王氏曰改作、勞民傷財。在於得已、則不如仍舊貫之善。仍は因るなり。貫は事なり。王氏曰く、改作すれば、民を勞し財を傷る。已むことを得るに在れば、則ち舊貫に仍るが善きに如かず、と。  
■何晏は、「鄭玄曰く、長府、藏の名なり。財貨を藏すを府と曰ふ。仍は因なり。貫は事なり。舊事に因らば則ち可なり。何ぞ乃ち複た更に改め作らん」を引いた。■皇侃は、「子騫、魯人を譏る。仍は因也。貫は事なり。言ふは政を為す道は舊事に因り是に自（よ）る。之を如何、何ぞ必ず改め作るべき所有りや。如之何は猶奈何のごとし。―　財貨は錢（銭）帛なり。錢帛を藏すを府と曰ふ。兵甲を藏すを庫と曰ふ」とした。■邢昺は、「子騫、魯人が民を勞し長府を改め作るを見る。而して此の辭を為す。仍は因なり。貫は事なり。言ふは、舊事に因りて則ち亦可なり、何ぞ必ず乃ち複た更に改め作るや」とした。  
　子の曰はく、夫の人言はず。言へば必ず中（あた）ること有り。夫音扶。中去聲。○言不妄發。發必當理。惟有德者能之。夫は音扶。中は去聲。○言は妄りに發せず。發せば必ず理に當たる。惟有德の者のみ之を能くす。  
■何晏は、「王粛曰く、言へば必ず中ること有るは、其の民を勞して改め作るを欲せざるを善す」を引いた。■皇侃は、「夫の人は子騫を指す。言ふは、子騫が性、言語少なく、語を言へば必ず事理に中る」とした。■邢昺は、「孔子、子騫の言を聞きてこれを善（よし）とす。夫の人は子騫を謂ふ。夫れ此の人を言ふは、其れ唯言はず則ち已にして、若し其れ言を發せば、必ず理に中ること有り。此れ何ぞ必ず改め作るを言ふ。是理に中る言なり。其の民を勞すことを欲せざるを善とす。故に以て中と為す。○ “ 鄭曰”より “改作”に至り 注す。○正義曰く、 “長府，藏名”と云ふは、魯、財貨を藏す府の名を長府と言ふ。 “藏財貨曰府”と云ふは、布帛を財と曰ひ、金玉を貨と曰ふ。『周禮·天官』に大府を王が治む藏の長と為すと有り。玉府は王の金玉玩好を掌る。內府は良貨賄藏內に在る者を主とし、外府は泉藏外に在る者を主とす。是財貨を藏すを府と曰ふ。府は猶聚のごとし。言ふは、財貨の聚る所なり。“仍は因、貫は事”、皆て『釋詁』の文」とした。  
  
○　子の曰はく、由が瑟（しつ）、奚（なん）ぞ丘が門に於て爲（せ）ん。程子曰言其聲之不和、與己不同也。家語云、子路鼓瑟、有北鄙殺伐之聲。蓋其氣質剛勇、而不足於中和。故其發於聲者如此。程子の曰く、言ふは、其の聲和せず、己と同じからず。家語に云ふ、子路の瑟を鼓す、北鄙殺伐の聲有り。蓋し其の氣質剛勇にして、中和に足りず。故に、其の聲を發するは此の如し。  
■何晏は、「馬融曰く、子路、瑟を鼓すこと、『雅』、『頌』に合はず」を引いた。■皇侃は、「子路が性は剛。其れ琴瑟を鼓して、亦、壯氣有り。孔子其れ必ず得て以て壽終へずを知る。故に、毎（ことごと）に、これを抑ふ。言ふは、汝瑟を鼓し何ぞ得て我門に在る。我が門は、文雅にして武を用ふ處に非らず。故に、自ら名を稱し以てこれを抑ふ。奚は何なり。侃謂へらく、此の門は謂孔子の住む所の門に非ず。故に、是は聖徳深奧の門なり。故に、子貢、武叔に答へて曰く、其の門を得る者は或は寡し」とした。■邢昺は、「蘇攏言く、子路が才學は分限なり」、「由は子路が名。奚は何なり。子路が性は剛。瑟を鼓して『雅』、『頌』に合はず。故に孔子、これに非ずして云はく、“由之鼓瑟，何為於丘之門乎？”其の剛を抑ふ所以」とした。  
　門人子路を敬せず。子の曰はく、由は堂に升れり。未だ室に入らず。門人以夫子之言、遂不敬子路。故夫子釋之。升堂入室、喩入道之次第。言子路之學、已造乎正大高明之域。特未深入精微之奥耳。未可以一事之失、而遽忽之也。門人夫子の言を以て、遂に子路を敬せず。故に夫子之を釋く。堂に升り室に入るは、道に入る次第に喩ふ。言ふは、子路の學、已に正大高明の域に造る。特（ただ）に未だ深く精微の奥に入らざるのみ。未だ一事の失を以て、遽（には）かに之を忽（おろそか）にす可からず。  
■何晏は、「馬融曰く、我が堂に升る。未だ室に入らざるのみ。門人、解らず、孔子の言（こと）為子路を賤しむと謂へり。故に複たこれを解す」。■皇侃は、「門人、孔子の瑟を譏るを見る。便ち復た子路を敬せず」、「孔子、門人が子路を敬さずを見る。故に又これを解かんと為す。古人、屋に當りて棟下を隔斷し窗戸と為す。窗戶の外を堂と曰ふ。窗戸の内を室と曰ふ。孔子の言はく、子路は弟子と為り、才徳已に大。未だ親しく我が室に入らずと雖も、亦、已に我が堂に登升す。未だ易く輕慢す可からず。若し近くしてこれを言へば、即ち屋の堂室を以て喩と為す。若しこれを推して廣めば、亦、聖人の妙處を室と為すを謂ふ。麤（そ、粗い）處を堂と為す。故に子路は堂を得、顏子は室に入る。故に下章、善人云を説く。亦、室に入らず是なり。此の前門に入ると言ふ所以。而して門人敬はず。其れ不敬と為す。故に、これを堂に引く。―　孔子、瑟を譏る。本は子路を輕んず可しと謂ふに非ず。政は行に在るのみ。而るに門人斯の意に達せず。承りてこれを慢（あなど）る。故に、孔子、これを解說す」とした。■邢昺は、「門人、孔子の意を解せず。謂ふは、孔子が言、子路を賤むと為し、故に、これを敬はず」、「以て門人、解せず。故に、孔子、複たこれを解く。言ふは、子路が學識の深淺を、外より內に入るが如く、其の門を得る者に譬ふ。室に入るを深と為し、顏淵是なり。升堂はこれに次ぐ、子路是なり。今、子路既に我が堂に升れり。但に未だ室に入らざるのみ。豈に不敬とす可きや？」とした。  
■子路は元来無頼で武と勇の人。詩経を瑟で奏し歌ふは、不得手。どうしても武勇風の音となる。孔子は、その性が過ぎるを正さんとして、それは我が門の音ではない、と指摘された。  
  
○　子貢問ふ、師と商と孰か賢（まさ）れる。子の曰はく、師は過ぎたる。商は及ばず。子張才高意廣、而好爲苟難。故常過中。子夏篤信謹守、而規模狹隘。故常不及。子張、才高く意廣し、而して苟も難きことを爲すを好む。故に常に中に過ぐ。子夏、篤く信じ謹んで守る、而して、規模狹隘。故に常に及ばず。  
■何晏は、「孔安国曰く、言ふは、俱に中を得ず」を引いた。■皇侃は、「師は子張。商は子夏なり。孰は誰なり。子貢、孔子に問ふ。師と商とを辨じ誰か賢にして勝ると為さんと欲す」、「過は子張が性の繁冗（はんじょう、繁雜紛多）を謂ふ。事を為すに好みて僻過（へきか、本筋から外れた過ち）在りて止らず」、「子夏が性の疏濶（そかつ、緩慢で無愛想）を言ふ。事を行ふに好みて及ばず止む」。■邢昺は、「此の章、子張、子夏が才と性の優劣を明らかにす」、「師は子張の名。商は子夏の名。孰は誰なり。子貢、孔子に問ひて曰く、子張と子夏の二人誰か賢才と為す？」、「孔子答へて言はく、子張が過と為す所當に已（や）まず，子夏則ち及ばず止む。言ふは、俱に中を得ず」とした。  
　曰く、然らば則ち師は愈れるか。與平聲。○愈、猶勝也。與yūは平聲。○愈るは猶勝るがごとし。  
■何晏は、「愈は猶勝のごとし」を引いた。■皇侃は、「愈は勝なり。子貢又問ふ。師は事を為すに過を好むが若し。過を好むは則ち勝と為すや」。■邢昺は、「愈は猶勝のごとし。子貢未だ夫子の旨明らかならず。以て師や過則ち是れ賢才、子夏に過ぐと為す。故に複た問ひて曰く、然らば則ち子張、子夏に勝るか？與は疑辭」とした。  
　子の曰はく、過ぎたるは猶及ばざるがごとし。道以中庸爲至。賢智之過、雖若勝於愚不肖之不及、然其失中則一也。○尹氏曰、中庸之爲德也、其至矣乎。夫過與不及均也。差之毫釐、繆以千里。故聖人之敎、抑其過、引其不及、歸於中道而已。道は中庸を以て至と爲す。賢智の過ぎたるは、愚不肖の及ばざるに勝れるが若しと雖も、然れども其の中を失ふは則ち一なり。○尹氏、曰く、中庸の德爲る、其れ至る。夫れ過と不及は均し。之を毫釐も差（たが）はば、繆（あやま）るに千里を以てす。故に聖人の敎、其の過を抑へ、其の及ばざるをを引きて、中道に歸るのみ。  
■皇侃は、「答へて言はく。既に倶に中を得ず。則ち過と不及とは異ること無し。故に云はく。過ぐは猶及ばざるがごとし。江熙云く。聖人動して物に軌を為す。人の勝否未だ易く輕く言はず。兩既にして倶に未だ中を得ず。是れ其の優劣は不明。以て來者に貽(伝へ残)す」とした。■邢昺は、「子貢、解さず。故に複たこれを解きて曰はく、“過ぐは當に猶及ばざるがごとし。”俱に理に中らず」とした。  
  
○　季氏周公より富めり。而るに求や之が爲に聚歛して之を附益す。爲去聲。○周公以王室至親、有大功、位冢宰、其富宜矣。季氏以諸侯之卿、而富過之。非攘奪其君、刻剥其民、何以得此。冉有爲季氏宰、又爲之急賦稅以益其富。爲wèiは去聲。○周公、王室の至親を以て大功有り、冢宰に位す。其の富宜（むべ）なり。季氏、諸侯の卿を以て、富之に過ぎたり。其の君を攘奪（奪取）し、其の民を刻剥（侵奪剥削）するに非ずんば、何を以てか此を得ん。冉有季氏が宰と爲り、又之が爲に賦稅を急（きびしく）し以て其の富を益す。  
■何晏は、「孔安国曰く、周公は天子の宰、卿士」、「孔安国曰く、冉求、季氏が宰と為り、この為に賦稅を急す」を引いた。■皇侃は、「季氏は魯の臣なり。周公は天子の臣。周に食采す（享用封邑的租赋）。爵は公と為す。故に、周公と為すを謂ふ。蓋し周公旦の後なり。天子の臣。地廣く祿は大。故に周公宜べ（当然）富めり。諸侯の臣。地狹く祿は小。季氏宜べ貧し。而るに今や僭濫（せんらん、分限を乱）して遂に天子が臣に勝る。故に、季氏、於周公より富めりと云ふ。―　天子が宰は即ち冢宰を謂ふ。冢宰は是れ有事の職。故に、卿士と云ふ」、「求は冉求也。季氏已に富めり。而るに求が季氏に仕ふ時、季氏が邑宰と為る。又斂聚（賦稅の取り立て）を助け賦稅を急す。以て季氏が富を附益す。―　賦稅を急すは民に下財の帛を斂（取り立てる）を謂ふ」。■邢昺は、「此の章夫子、冉求が賦稅を重くすを責む」、「季氏は魯の臣、諸侯の卿なり。周公は天子の宰、卿士。魯は其の後なり。孔子の時、季氏、魯政を專らに執る。盡く其の民を征し、其の君、深宮に蠶食（次第に侵食）され、賦稅皆て已に有ること非ず。故に季氏、於周公より富めり」、「時に冉求、季氏が家宰と為り、又、これが為に賦稅を急す。財物を聚斂して季氏に陪附助益す」とした。  
　子の曰はく、吾が徒に非ず。小子鼓を鳴らして之を攻めて可なり。非吾徒、絶之也。小子鳴鼓而攻之、使門人聲其罪以責之也。聖人之惡黨惡而害民也如此。然師嚴而友親。故己絶之、而猶使門人正之。又見其愛人之無已也。○范氏曰、冉有以政事之才施於季氏。故爲不善至於如此。由其心術不明、不能反求諸身、而以仕爲急故也。吾が徒に非ずは、之を絶つなり。小子鼓を鳴らして之を攻めよは、門人をして其の罪を聲（なら）して以て之を責めしむなり。聖人の惡に黨して民を害することを惡むこと此の如し。然れども師は嚴にして友は親し。故に己に之を絶ちて、而して猶門人をして之を正さしむ。又其の人を愛することの已むこと無きことを見る。○范氏が曰く、冉有政事の才を以て季氏に施す。故に不善を爲すこと此の如きに至る。其の心術明らかならざるに由りて、反りて諸身に求むこと能はずして、而して仕を以て急とする故なり。  
■何晏は、「鄭玄曰く、小子は門人なり。鼓を鳴す其の罪を聲して以てこれを責む」を引いた。■皇侃は、「徒は門徒なり。孔子言ふは、冉求が昔し是れ我が門徒と雖も、而るに我が門徒皆て仁義を尚す。今、冉求遂に季氏が聚斂を急すを為す。則ち復た吾が門徒に非ず。故に禮に云ふ、孟獻子が曰く、百乘の家、聚斂の臣を畜（やしな）はず。其れ聚斂の臣を畜ふよりは、寧ろ盜臣有らん。言ふは、盜臣乃ち財を傷（そこな）ふ。而るに聚斂の臣則ち仁義を傷ふ。財を傷ふは仁義を傷ふに如かず」、「小子は門徒の諸の弟子なり。攻は治なり。求、既に季氏が為に聚斂す。故に孔子、先に云ふ。復た我が門徒に非ず。又、諸の弟子をして鼓を鳴らしこれを治む。鼓を鳴す所以は、若し直爾（事さほどと）して治め、其の過を言はずんば則ちこれを聞く局（曲解）す。故に、鼓を鳴らして且つこれを言ふ。則ち聞く者は衆し。繆協が云く、季氏、諫を納れること能はず。故に、求や匡し救ふを得ること莫し。匡し救ふこと存ずんば、其の義屈す。故に、吾が徒に非ずと曰はく。求に譏るに致る。深く季氏を疾む所以。子然り、其の義を問ひ明らかにす」とした。■邢昺は、「小子は門人なり。冉求、亦、夫子の門徒。當に仁義を尚すべし。今、季氏が為に聚斂し、仁義に害す。故に夫子これを責めて曰はく、我が門徒に非ず。其の門人をして鼓を鳴らし以て其の罪を聲らしてこれを攻め責めしむ。可なり。○ “孔曰：周公，天子之宰卿士”を注す。○正義曰く、何休云く、宰は猶治のごとし。三公の職、尊を號く名なり。杜預、『左傳』を注して曰く、卿士は王の執政者なり」とした。■魯は放浪中の孔子を呼び戻そうとする。孔子をよしとしない者との妥協で冉求が呼び戻された。左伝、哀公十一年（BC484年）によれば、季康子は冉求を通じ、田土の広さに応じて課税する増税案について孔子の意見を求めた。孔子は三度「知らない」と返答をしなかった。内々に聞くと、増税は礼の基準に外れ、周公の法を破るもので、それが分からないようではどうしようもないというものであった。当時は戦費調達のための増税の時代であり、季康子は増税に踏み切った。孔子は、これを仁義を害なふものと、季康子ではなく冉求を名指しで非難した。一方、魯では、冉求は齊と郎（ろう）に戦い功を挙げ、季康子の下問に、孔子に学べりと腹芸の才を発揮し、季康子をその気にさせ、翌年、孔子を魯に呼び戻した。孔子は衛の霊公に、軍事の事は知らないと公言（衛霊公篇）しており、冉求は内心ハラハラしていたことであろう。  
  
○　柴（し）は愚（ぐ）。柴孔子弟子、姓高字子羔。愚者知不足而厚有餘。家語記、其足不履影。啓蟄不殺。方長不折。執親之喪、泣血三年、未嘗見齒。避難而行、不徑不竇。可以見其爲人矣。柴は孔子の弟子、姓は高、字は子羔。愚は、知足らずして厚きこと餘り有り。家語に記す、其の足影を履まず。啓蟄殺さず。方に長ずるを折らず。親の喪を執る、泣血三年、未だ嘗て齒を見さず。難を避けて行く。徑せず竇せず。以て其の人と爲りを見る可し。  
■何晏は、「弟子高柴、字は子羔。愚は愚直の愚」とした。■皇侃は、「此れ以下數子各（おのおの）累有るを評す。柴は弟子なり。其の累愚に在り。王弼云く、愚は仁を好むこと過たり」とした。■邢昺は、「此の章、孔子、六弟子の德行、中失を曆評す」、「高柴が性は愚直なり」とした。■愚の字形は厳荘の状、その風姿でありながら機略に乏しい。狡智の人からすれば、利発さに欠ける。しかし、「大賢は愚なるが如し」、逆に「哲として愚（哲学者顔をして愚か）」といふ（字統）。  
　參（さん）は魯（ろ）。魯鈍也。程子曰、參也竟以魯得之。又曰曾子之學、誠篤而已。聖門學者、聰明才辯、不爲不多。而卒傳其道、乃質魯之人爾。故學以誠實爲貴也。尹氏曰、曾子之才魯。故其學也確。所以能深造乎道也。魯は鈍なり。程子の曰く、參は竟に魯を以て之を得たり。又曰く、曾子の學、誠篤のみ。聖門の學者、聰明才辯、多からずとせず。而れども卒に其の道を傳ふるは、乃ち質魯の人のみ。故に學は誠實を以て貴しとす。尹氏が曰く、曾子の才は魯。故に其の學や確（かた）し。能く深く道に造る所以なり。  
■何晏は、「孔安国曰く、魯は鈍なり。曾子が性遲鈍」を引いた。■皇侃は、「參は曾參なり。魯は遲鈍なり。言ふは、曾子が性遲鈍なり。王弼云く、魯は質文に勝るなり」。■邢昺は、「曾參が性は遲鈍なり也」とした。■魯の字形は、祖祭に魚を薦め祝禱して魯壽を求めるもの、魯寿は嘉寿のこと。「賁純（ひじゅん）にして以て魯（おほい）なり」（字統）、おめでたいほど純粋な人は鈍くさい。  
　師（し）は辟（へき）。辟婢亦反。○辟便辟也。謂習於容止、少誠實也。辟pìは婢bì亦yìの反（音が合はない）。○辟は便辟なり。容止（立ち居振る舞ひ）に習ひて、誠實少なきを謂ふ。  
■何晏は、「馬融曰く、子張が才人に過ぎたり。失、邪辟にして過を文するに在り」。■皇侃は、「師は子張なり。子張は文を好むこと其れ過たり。故に、僻と云ふ。王弼云く、僻は飾ること過差（かさ、 分に過ぎる）なり」とした。■邢昺は、「子張は才人に過ぎたり。失、邪辟にして過を文するに在り」と馬融を引いた。■辟の字形は、人の後ろより円形に肉を刳（えぐ）りとる形で罪辟が原義、その引伸で多義あり（字統）。ここでは、辟は、過ぎて本を失する才をいふ。  
　由（ゆう）は喭（げん）。喭五旦反。○喭粗俗也。傳稱喭者、謂俗論也。○楊氏曰四者性之偏、語之使知自勵也。吳氏曰此章之首、脱子曰二字。或疑、下章子曰當在此章之首、而通爲一章。喭yànは五wǔ旦dànの反（音が合はない）。○喭は粗俗なり。傳に喭と稱するは、俗論を謂ふなり。○楊氏が曰く、四つの者は性の偏、之を語（つ）げて自ら勵むことを知らしむ。吳氏が曰く、此の章の首（はじめ）、子曰の二字を脱す。或は疑ふらくは、下章の子曰は、當に此の章の首に在りて、通じて一章と爲すべし。  
■何晏は、「鄭玄曰く、子路が行、畔喭（はんがん、剛猛粗率の貌）に失せり」。■皇侃は、「由は子路なり。子路が性は剛。失は喭に在り。王弼云く、喭は剛猛なり」。■邢昺は、「子路が行は畔喭に失せり」と鄭玄を引いた。■喭を剛猛、粗俗とするのは、「子路、性鄙（いや）しく、勇力を好み、志伉直（こうちょく）にして雄鶏を冠し、豭豚を佩び、孔子を陵暴する（仲尼弟子列伝）」によろう。喭は古くは、唁、諺とされ、唁（とむらふ、なぐさめる）は生を弔すとあり、死を弔す弔（とむらふ、いたむ）に対するもの。諺は「俗の善語」の義からくる（字統）。残された人々を唁ふ情の篤さがあり、誰にも分かる言葉で語る、野武士の風があったのだろう。「片言（片方の訴え）以って獄者を折（判決する）は、其れ由か」と孔子が評したごとく、子路は人情や世間知に通じており、陽貨、公山不狃、南子などとの対応においては、孔子の反応より的確であった。  
　子の曰はく、囘（かい）は其れ庶（ちか）きか。屢（しばしば）空（むな）し。庶近也。言近道也。屢空數至空匱也。不以貧窶動心而求富。故屢至於空匱也。言其近道、又能安貧也。庶は近なり。言ふは、道に近きなり。屢空しは、數（しばしば）空匱（くうひつ、窮乏）に至るなり。貧窶（ひんる、極貧）を以て心を動かし、富を求めず。故に屢空匱に至る。言ふは、其れ道に近し。又能く貧に安んず。  
■皇侃は、「記者は上列の四子が病重しを先に於てす。此より以下孔子を引く。更に、顏子を擧げて精能を後に於てす。此の義を解くは、凡そ二通り有り。一に云く、庶は庶幾なり。屢は毎なり。空は窮匱なり。顏子が庶は幾に慕（した）ふ。故に、財利を遺忽（いこつ、嫌棄輕視）す。家毎く空貧にして簟瓢陋巷（たんひょうろうこう、生活簡朴，安貧楽道）たる所以。故に、王弼云く。庶幾は聖を慕ふ。財業を忽忘す。而して屢空匱なり。又、一に通じて云く。空は猶虛のごとし。言ふは、聖人が體は寂。而して心恆に虛にして累無し。故に、幾動せば即ち見（あら）はる。而るに賢人體無きこと能はず。故に、幾見はれず。但に庶幾は聖を慕ふ。而して心或時にして虛。故に屢空と曰ふ。其の虛一に非ず。故に、屢名生ず。故に、顏特に進みて云く。空は回が體す所に非ず。故に、庶にして數得る。故に、顧歡云く、夫れ無欲に無欲なるは、聖人の常なり。無欲に欲有るは、賢人の分なり。二欲同じく無し。故に、全き空以て聖と目す。一つ有り一つ無し。故に毎に虛以て賢と稱す。賢人、有よりこれを觀る。則ち有欲に無欲。無よりこれを觀る。則ち無欲に欲有り。虛にして未だ盡さず。屢に非ずんば如何。大史叔明これを申して云く、顏子は上賢。體具はり敬す則ち精なり。故に、進退の事無し。義に就くこと上以て屢名を立つ。按ずに、其れ仁義を遺（わす）れ禮樂を忘れる。支體を隳（くず）し聰明を黜（しりぞ）く。坐忘して大きに通ず。此れ忘有の義なり。有を忘れ頓盡（とんじん、尽き尽く）す。空に非ずんば如何。以て聖人これを驗（しるし）とするが若し。聖人は忘忘。大賢は忘忘能はず。忘忘能はずば、心復た未だ盡さず。一未一空。故に、屢名生ずなり」とした。■孔子を聖人、道を体現する人、顔回をそれに近い弟子とするが為に、庶を近とし、顔回を聖人あるいは道に近いとする。以下に空を虚とし、禅僧や道家の虚心、無為無欲の境地のごときにたとえる論議となる。「其庶乎屢空」は普通に読めば、しばしば空に近い、ぼんやりしてからっぽにみえる。からっぽの家で、からっぽの胃袋で、それでもその中に楽しみがあるとする。よく云えば、「大賢は愚なるが如し」。しかし、身体を損ねると心配する。  
　賜（し）は命を受けずして、貨殖す。億（おもんばか）れば則ち屢中（あた）る。中去聲。○命謂天命。貨殖貨財生殖也。億意度也。言子貢不如顏子之安貧樂道。然其才識之明、亦能料事而多中也。程子曰子貢之貨殖、非若後人之豐財。但此心未忘耳。然此亦子貢少時事。至聞性與天道、則不爲此矣。○范氏曰屢空者、簞食瓢飮屢絶而不改其樂也。天下之物、豈有可動其中者哉。貧富在天。而子貢以貨殖爲心、則是不能安受天命矣。其言而多中者、億而已。非窮理樂天者也。夫子嘗曰賜不幸言而中。是使賜多言也。聖人之不貴言也如是。中zhòngは去聲。○命は天命を謂ふ。貨殖は、貨財生殖するなり。億は意度（おもひはか）るなり。言ふは、子貢、顏子の貧に安んじ道を樂しむに如かず。然れども其の才識の明、亦能く事を料りて多く中る。程子の曰く、子貢の貨殖は、後人の財を豐かにするが若きに非ず。但に此の心未だ忘れざるのみ。然れども此れ亦、子貢少（わか）かりし時の事。性と天道とを聞くに至りて、則ち此を爲さず。○范氏が曰く、屢空しは、簞食瓢飮屢々絶えて、而も其の樂しみを改めず。天下の物、豈に其の中を動す可き者有らんや。貧富は天に在り。而るを子貢貨殖を以て心と爲す、則ち是れ天命を安んじ受くること能はず。其の言ひて多く中るは、億るのみ。理を窮め天を樂しむ者に非ず。夫子嘗て曰はく、賜は不幸にして、言ひて中る。是れ賜をして多言ならしむ。聖人の言を貴ばざること是の如し。  
■何晏は、「言ふは、回は聖道に庶幾して、數空匱と雖も、而して樂しみ其の中に在り。賜は教命を受けずして、唯に財貨是殖す。是非を億度す。蓋し回を美（ほむ）は、賜を勵す所以なり。一に曰く、屢は猶每のごとし。空は猶虛中のごとし。聖人の善道を以て、數子の庶幾に教へる。猶道を知るに至らざるごときは、各（おのおの）內に此の害有り。其れ庶幾に於て每に能く虛中なる者は、唯回。道を懷（おも）ふこと深遠。不心を虛にせざるは、道を知ること能はず。子貢、數子の病無しと雖も、然して亦道を知らずは、理を窮めずと雖も幸に中る。天命に非ずして偶（たまたま）富めりと雖も、亦、心を虛せざる所以なり」とした。■皇侃は、「此れ孔子、又、子貢の累を評す。亦、二通有り。一に云く、不命を受けずは、子貢が性は動、天を信じ命に任ずこと能はずを謂ふ。是れ命を受けず。而して貨殖は財物を貨と曰ふ。種藝を殖と曰ふ。子貢が家は富み清素能はず。惡を為す所以。又、一通に云く、殷仲堪（いんちゅうたん、～ 399年、東晋武将）云。嬌君命を受けず。江熙云く、賜は濁世の祿を榮せず。亦、道に幾庶する者なり。然るに貨殖の業有ると雖も、恬愉（てんゆ、心安んじ雑念がないこと）に足らず。敢へて回を望まざる所以のみ。亦、曰く、命を受けずは、子貢、孔子の教命を受けずを謂ふ。故に、命を受けずと云ふ」、「此れ亦、二通有り。一に云く、憶は心事宜を憶度すを謂ふ。言ふは、子貢が性、是非を憶度すを好む。而して屢幸にして中る。亦、是れ失なり。故に、君子は憶せず信ぜず。又、一通に云く、虛心顏（回）が如くせずと雖も、而るに事理を憶度せば必ず亦、能く屢中る。故に、左傳に、邾隱公、魯に朝す。玉を執るに高く、其の容仰ぐ。魯の定公、玉を受くこと卑く、其の容俯す。子貢曰く、禮を以てこれを觀るに、二君皆て死亡有り。君は主と為す。其れ先ず亡びんや。是の歲定公卒す。仲尼曰く。賜不幸にして言へば中る。是れ賜をして多く言はしめるものなり。此れ憶せば中るの類なり。王弼曰く、命は爵命なり。憶は憶度なり。子貢、爵命を受けずして能く富むと雖も、理を窮めずして幸に中ると雖も、蓋し顏の庶幾に逮（およ）ばず。四子の病む所を輕んず。故に、子曰と稱し以てこれを異とす。此の注と前の通竝びて會す。此れ以下竝び是の後解す。中は猶心のごとし。虛心を謂ふ。禮に曰く、虛中以てこれを治む。孔子を謂ふ。柴參の屬なり。竝びて孔子の教を庶幾の事に被る。道は庶幾の道を謂ふ。其れ各愚魯僻喭の害有るに緣（よ）る。故に、庶幾の事に至知すること能はず。唯に回一人能く道を深遠に懷ふ。故に、虛心に庶幾す。更に虛心の義を須べき所以を明らかにす。庶幾の道は既に深遠なり。庶幾を知らむと欲（す）は、虛心ならば乃ち其の道を知る。愚魯僻喭の病無し。既に病無くば、應（まさ）に能く庶幾すべし。何ぞ亦、能はざるや。其の不知の由を解す。申すは先に解せる憶則屢中なり。子貢、虛心能はざるを言ふ。心、憶度を好む。顏（回）の如く窮理すること能はずと雖も、時（常）に幸にして中ること有り。幸にして中るが故に、大道を知ること能はず。此れ不受命を釋して貨殖なり。天命に非ずと雖とは、當時の天子の命を受くに非ずと雖を謂ふ。偶（たまたまの）富は、家自偶富を謂ふ。祿位の所得に非ず。然り、時祿に非ずして富むと雖も、亦、清虛の士に非ず。故に、亦、大道を知らず。事を憶せば幸にして中る。家富みて榮心に及ぶ。竝びて虛心ならざる所以なり也」とした。■邢昺は、「此れ蓋し孔子、顏回を美（ほ）む。賜を勵ます所以なり。其の說、二つ有り。一に曰く、“屢は數なり。空は匱なり。億は度なり。言ふは、回は庶幾の聖道、數（しばしば）空匱（くうひつ）貧窶（ひんる）と雖も、而して樂しさ其の中に在り。是れ回を美む。賜は命を受けず。唯に貨財是を殖す。億度の是非の若きは則ち數中る。此れ賜を勉め勵す所以を言ふ”。一に曰く、“屢は猶每のごとし。空は猶虛中のごとし。言ふは、孔子、聖人の善道を以て、數子の庶幾を教ふも、猶道を知るに至らざるは、各內に此の害有るが故なり。其れ庶幾に於いて每能く虛中なるは、唯に顏回が道を懷ふこと深遠なること有り。若し虛心ならずんば、道を知ること能はず。子貢、數子の病無しと雖も、然るに亦、道を知らざるは、窮理せずと雖も幸にして中る。天命に非ずして偶（たまたま）富むと雖も、此の二累有りて、亦、虛心ならざる所以なり。○ “弟子高柴，字子羔”を注す。○正義曰く、『史記·弟子傳』に云く、“高柴、字子羔”。鄭玄曰く、“衛人”。“孔子に少（わか）きこと三十歲”。『左傳』亦、子羔と作（す）。『家語』子高と作（す）。『禮記』子皋と作（す）。三字同じからずも、其の實は一なり。○ “鄭曰子路之行，失於畔喭”を注す。○正義曰く、舊注に “反喭”、字書に“反喭，失容なり”と作（す）。言ふは、子路が性行剛強にして、常に反喭、禮に於て容を失す。今本は反畔と作（す）。王弼云く、“剛猛なり。”○“ 言回”より “心也”のに至り注す。○正義曰く、“言回庶幾聖道”と云ふは、『易·下係辭』に云く、“顏氏の子其れ庶幾に殆（ちか）きや？”是れ回は幾微の聖道を庶慕す（請ひ慕ふ）。 “雖數空匱，而樂在其中”と云ふは、即ち“簞食瓢飲（たんしひょういん）、其の樂しみを改めず”是なり。“賜不受教命”と云ふは、夫子が禮教の命を受けざるを言ふ。“惟財貨是殖”と云ふは、言唯に務めて貨財をして蕃息（盛んにする）を生殖せしむなり。“億度是非”と云ふは、又、心を用ひ人事の是非を億度すを言ふ。“蓋美回，所以勵賜也”と云ふは、孔子の意、顏回が貧にして道を樂しむを美（ほ）むを言ふ。子貢を勸勵す所以。言ふは、汝既に富めり。又、能く億して則ち屢（しばしば）中る。何ぞ得て教命を受けずや？ “一曰”以下を云ふは、何晏又一說を為す。“以聖人之善道、教數子之庶幾”と云ふは、孔子、聖人庶幾の善道を以て、並びて六子を教ふを言ふ。“猶不至於知道者、各內有此害”と云ふは、聖人、倦ず、並びてこれを教誨し、而して猶尚（依然として）知に於て幾微善道に至ること能はざるは、其の各（おのおの）自らの內に愚、魯、辟、喭の病害有るが故を以てすを言ふ。“其於庶幾每能虛中、唯回”と云ふは、唯に顏回每能く其の中心を虛くし、庶幾の道を知るを言ふ。 “懷道深遠、不虛心、不能知道”と云ふは、此れ虛中の由を解す。由其れ道に至り深遠。若し其の中心虛しからずんば、則ち道を知ること能ず。“子貢雖無數子之病”と云ふは、愚、魯、辟、喭の病無きを謂ふ。“然亦不知道”とは、亦、如四子不聖道を知らざるを謂ふ。“雖不窮理而幸中，雖非天命而偶富，亦所以不虛心也”と云ふは、此れ子貢、道を知らざるを解す。由は此の二累有るに於けるなり。窮理せずして幸にして中ると雖も、釋經に“億せば則ち屢中る”、言ふは、窮理せず性を盡すと雖も、但にこれを億度し、幸にして其の言中るなり。『左傳』“定（公）十五年の春、邾の隱公來朝す。子貢觀る。邾子、玉を執るに高く、其の容仰ぐ。公、玉を受くに卑く、其の容俯す。子貢曰く、‘禮を以てこれを觀るに、二君は皆死亡すこと有り’。夏五月壬申，公薨ず。仲尼曰く、‘賜、不幸にして言へば中る’”。哀（公）七年、“邾子益（隱公）を以て來る（連れて戻り幽閉する）”、是其れ屢中る。“雖非天命而偶富”、釋經に“不受命而貨殖”なり。言ふは、富の道に致るは、當に天命に由り與ふ爵祿。今子貢は天命に因らざる爵祿。而るに能く自ら富を致ず。故に“偶富”と曰ふ。言ふは、億度の勞有りて、富に經營の累有り、此の二事を以て、何ぞ虛心に暇して（離れて）以て道を知る？故に、 “亦、虛心ならざる所以なり”と云ふ」。■二つの孔子評がある。一つは命を受けず貨殖する、一つは億したことが中（あた）る。「命を受けず」の命とは天命であろうが、貨殖の命を受ける人とは天子や諸侯という税を得て富む身分、あるいは大農や大生産者や大商賈という身分にある人。子貢は、本来、貨殖する立場の人間では無い。当時は下克上のはじまった世、才覚あるものが、戦争において物資を動かし富を売ることが可能となった。子貢は外交活動に長けており、機を見て物資を動かしていたのであろう。子貢は、また、外交センス、人物評に長けており、その人物の見立て、政治的読みがよく当った。■愚、魯、辟、喭を累（しばりつける煩い）や病とする。異能であり、空も貨殖も億中も異能である。孔子にはないものが弟子にはあった。ただ、孔子は過ぎたる異能は及ばざるが如く、弟子がそれによって己を全うできなくなることを危惧されたのではないか。  
  
○　子張善人の道を問ふ。子の曰はく、迹を踐（ふ）まず。亦室に入らず。善人質美而未學者也。程子曰、踐迹如言循途守轍。善人雖不必踐舊迹、而自不爲惡。然亦不能入聖人之室也。○張子曰、善人欲仁而未志於學者也。欲仁故雖不踐成法、亦不蹈於惡。有諸已也。由不學、故無自而入聖人之室也。善人は、質美にして未だ學びざる者なり。程子の曰く、迹を踐むは、途に循（したが）ひ轍を守ると言ふが如し。善人は必ずしも舊迹を踐まずと雖も、而れども自ら惡を爲さず。然れども亦聖人の室に入ること能はず。○張子が曰く、善人は仁を欲して未だ學に志さざる者なり。仁を欲す、故に成法を踐まずと雖も、亦惡を蹈まず。諸を已（や）むるに有すればなり。不學に由る、故に自ら聖人の室に入ること無し。  
■何晏は、「孔安国曰く、踐は循なり。言ふは、善人は但に舊跡に循ひ追はざるのみ。亦、少（わか）き能く業を創（はじ）む、然ども亦、聖人の奧室に入らず」を引いた。■皇侃は、「此れ善人を問ふ。聖人に非ず。其の道云何而して善人と為すと謂ふ可きかを問ふ」、「善人の法を答ふ。踐は循なり。舊跡を跡むなり。言ふは、善人の道は、亦、當に別に宜しく善事を創建すべしとするがごとし。唯に前人が舊跡に依り循ふを得ざるのみ」、「又、創立有りと雖も、未だ必らずしも能く聖人の奧室に入らしめず。能く室に入るは顏子のみ。―　創業は仁義の業を創むを謂ふ。聖人の奧室とは、即ち前に云ふ子路堂に升る。未だ室に入らず。是なり」とした。■邢昺は、「此の章、善人行ふ所の道を論ず」、「何の道を行はば善人と謂ふ可きかを問ふ」、「孔子、其の善人の道を答ふ。踐は循なり。跡は已に行はれた舊事の言。善人は但に舊跡に循ひ追ふのみにあらず。當に自ら立ちて功を立つ事なり。而して善人は謙を好（よ）みし、亦、少くして能く業を創む。故に亦、聖人が奧室に入ること能はず」とした。■不踐跡を、伝統的に、先人の途に従うのみでなく自分の業を立てよ風に解釈している。程子は、疑問を呈し、先人の途に従はないが、悪をなさないとした。これらの解釈は日本人にはピンとこない。子張は才気煥発、過ぎたる人。大胆にも孔子の室に入り、善人の道を問ふた。先生は、ピシャリと言はれた、善人といふは、「不踐迹亦不入於室（先人の域にも達していない者がいきなり室に入るようなことはしない）」と。善人の道に外れたことを行ひて、善人の道を問ふ、人を殴りつけて暴力を否定するがごとき、笑止千万。  
  
○　子の曰はく、論篤き、是れ與（くみ）せば、君子者か。色莊者か。與如字。○言但以其言論篤實而與之、則未知其爲君子者乎、爲色莊者乎。言不可以言貌取人也。與は字の如し。○言ふは、但に其の言論の篤實を以て之に與せば、則ち未だ其れ君子者爲らんか、色莊者爲らんかを知らず。言ふは、言貌を以て人を取る可からず。  
■何晏は、「（孔安国曰く）論篤とは、口に擇言無きを謂ふ。君子とは、身に鄙行無きを謂ふ。色莊とは、惡せずして嚴（おごそか）にして、以て小人を遠ざく。言ふは、此の三つは、皆以て善人と為す可し」を引いた。■皇侃は、「此れ亦、善人の道に答ふなり。當に是異時の問のごとし。故に更に子曰を稱す。倶に是善に答ふ。故に、共に一章に在り（朱熹は章を分けた）。篤は厚なり。言ふは、善人有論説する所有り。必ず篤厚謹敬の辭を出す。故に、論篤き是與すと云ふ。又、能く君子が行を行ふ。故に、君子者かと云ふ。又、顏色莊嚴須（す）べし。故に、色莊者かと云ふ」、「擇は、麤（そ、粗雑）を除き好を取るを謂ふ。論篤是言語并せて善し。故に、復た擇ぶ可き言無し」、「皆て善を行ふ所。故に鄙惡無し。然して此の注亦、と上互す」、「威にして猛せず是なり。―　三つは色を行ふを言ふ。云必ず三つを備ふは皆善人と為す可し。明らかに能く一つ有るが若きは則ち亦、善人と為す可し。必ずしも三つを備へず。殷仲堪云く、夫れ善者は淳穆（じゅんぼく、情に篤く恭敬）の性。これを體すこと自然。往跡を擬步せずと（先人の業に通じている）雖も、奧室に入り闚（うかがふ）こと能はず。論篤、質正は君子との一致有らむ」とした。■邢昺は、「此れ亦、善人の道なり。故に、同じく一章と為す。當に是異時の語。故に別に “子曰”と言ふ」、「篤は厚なり。口に擇言無きを謂ふ。論說する所皆て重厚、是善人か」、「身に鄙行無き君子を言ふ。亦、是善人か？」、「能く顏色莊嚴なるを言ふ。小人をして畏威すは、亦、是善人か？孔子は謙り、正言せず、故に “與”、“乎”と云ふは以てこれを疑ふ。○ “論篤”より “善人”に至りて注す。○正義曰く、“口無擇言”と云ふは、《孝經》の文なり。言ふ所皆て善、故に擇ぶ可きこと無し。“身無鄙行”と云ふは、並びて美、鄙惡無き所以なり。“以遠小人，不惡而嚴”とは、《周易·遯卦·象辭》なり」とした。■孔安国が論篤、君子、色莊を善人としたことで話しがそれた。論篤（篤く論じること）に組すは君子か？色荘煮か？その行ないをみなければ、判かりませんぞ！暗に子張や子游のグループをさそう、その行為をみて判断せよとされたがごとき。  
  
○　子路問ふ、聞くままに斯れ行はん諸（や）。子の曰はく、父兄在すこと有り、これを如何（いかん）ぞ、其れ聞くままに斯れこれを行はん。冉有問ふ、聞くままに斯れ行はん諸（や）。子の曰はく、聞くままに斯れこれを行へ。公西華が曰く、由や問ふ、聞くままに斯れ行はんや。子の曰はく、父兄在すこと有り。求や問ふ、聞くままに斯れ行はんや。子の曰はく、聞くままに斯れこれを行へ。赤惑ふ、敢へて問ふ。子の曰はく、求は退く。故にこれを進む。由は人を兼ぬ。故にこれを退く。兼人謂勝人也。張敬夫曰、聞義固當勇爲。然有父兄在、則有不可得而專者。若不稟命而行、則反傷於義矣。子路有聞、未之能行、惟恐有聞。則於所當爲、不患其不能爲矣。特患爲之之意或過、而於所當稟命者有闕耳。若冉求之資稟、失之弱、不患其不稟命也。患其於所當爲者、逡巡畏縮、而爲之不勇耳。聖人一進之、一退之。所以約之於義理之中、而使之無過不及之患也。人を兼ぬは、人に勝るを謂ふ。張敬夫が曰く、義を聞きては固より當に為（する）に勇むべし。然れども父兄在すこと有れば、則ち得て專らにす可からざる者有り。若し命を稟（う）けずして行へば、則ち反りて義を傷（やぶ）る。子路聞くこと有りて、未だ之を行うこと能はずんば、惟恐るは聞くこと有らんことを。則ち當にすべき所に於て、其のすること能はざるを患へず。特（ただ）に之をする意、或は過ぎて、當に命を稟くべき所の者に於て闕くこと有らんことを患ふのみ。冉求が資稟（しひん、生来の性格）の若きは、之を弱きに失す。其の命を稟けざるを患へず。其の當にすべき所の者に於て、逡巡（しゅんじゅん）、畏縮（いしゅく）して、之をすること勇ならずを患ふのみ。聖人、一は之を進して、一は之を退く。之を義理の中に約して、之に過不及の患、無からしむ所以なり。  
■何晏は、「包氏曰く、“窮を賑し救乏の事」、「孔安国曰く、當に父兄に白（まう）すべし、自ら專にすることを得ず」、「孔安国曰く、其の問同くして答異るに惑ふ」、「鄭玄曰く、言ふは、冉有が性は謙退なり、子路は務めて人に勝ち尚んとするに在り。各其の人が失に因りてこれを正す」を引いた。■皇侃は、「斯は此なり。此れ此賑窮救乏の事に於けるなり。諸は之なり。子路、孔子に問ふ。若し周く窮救乏の事有るを聞けば、便ち得てこれを行ふこと不（せず）か」、「人子に私假與（私的な受与）無し（子婦無私貨，無私畜，無私器，不敢私假，不敢私與、「礼記、内則）」。故に、若し事有らば、必ず先ず父兄に啓告すべし」、「既に父兄に由る。故に、己如何にぞ聞きて行はんか。不可を言ふ」、「子路と同じく問ふ」、「此の答異なり。聞きて即ちこれを行ふを言ふ」、「公西華、二人の問同じくして答異なるを疑ふ。故に、先ず二人の問答を領す。此れ子路が問答を領す」、「此の領冉有の問答なり。求は冉有が名なり」、「惑は疑惑なり。二人の問同じくして孔子の答異なり。故に、己に疑惑生ず。赤は公西華が名なり」、「敢は果敢なり。既に惑其れ深し。故に、果敢にしてこれを問ふ」、「答は異義を答ふ所以なる。言ふは、冉求は謙退、故にこれを引きて進ましむ。先に父兄に白（まう）すを云はざる所以なり」、「言ふは、子路が性は行行して人を兼ぬ。好は率爾（そつぢ）に在り。故にこれを抑退す。必ず父兄に白さしむ。―　或ひと問ひて曰く、禮に必ず父兄に諮（はか）るが若きは、則ち子路抑ふに非らず。必ず諮るが若きは、則ち冉求引くに非ず。今、夫子進退を云ふ。其の旨を請ひ問ふ。或ひと答へて曰く。夫れ賑施の理、事に大小有り。大は車馬。小は或は一飡。若し其の大なるもの必ず諮れば、小は專に行ふ可し。而して由が施は大小無し。悉く竝びて諮らず。求は大小悉く諮る。今、故に由が不諮を抑ふに、其れ竝びて諮らしまんと欲（す）。冉が必諮を引きて、其れ竝びて不諮せしむ。但に子路が性進み、抑ふと雖も其の退を患はず。冉求が性退く。引くと雖も其の過を嫌ねず」とした。■邢昺は、「此の章、施予の禮を論ず。孔子が問同じく答異なる意を並ぶ」、「諸は之なり。子路、孔子に問ひて曰く、“若し人が窮乏當に賑救の事斯に聞かば、即ち得てこれを行ふか？」、「言ふは、當に先ず父兄に白し、得て自ら專にせず」、「此の問と子路と同じ、而して答ふ所異なり」、「赤は公西華が名なり。其の問同じくして答異なるを見る。故に疑惑して孔子に問ふ」、「此れ孔子が言、其の答異なる意なり。冉有が性は謙退、子路は務めて人に勝尚在り。各其の人に因り失してこれを正す。故に答異とす」とした。■行諸の「諸」を伝統的には「賑窮救乏の事」貧窮者に施し救う事とし、「退」を「謙退」、兼を「勝尚人」としたが、朱熹等は「諸」をそうではなく「義」のこととし、「退」を「逡巡、畏縮」、兼を「勝人」とし、ややこしいことになった。父兄在すとあり、義を行ふに父兄に聞くは意味をなさない。貧窮者に家財を施すには、子に私財は無く、父兄の意向を聞いて行ふが常識であった。兼は説文に、「并（あはす）なり。又に从（したが）ひ秝を持つ。兼は二禾を持つ、秉は一禾を持つ」とある。子路は財を兼ねる、自分の財を共用物として友に使はせる。よい性格と思ふが、そこには危うさがある。冉有は、父兄が”よい“といってもそれがどうなるかを考えてなかなか返事をせず、自分の判断で行ふ。孔子が季氏の増税案を激しく否定するも、時勢の趣く所とそれを実施した。子路なら孔子の意を聞いたとたんに、即刻、増税案を却下する。  
  
○　子匡に畏る。顏淵後（おく）れたり。子の曰はく、吾女（なんじ）を以て死せりと爲す。曰く、子在す、囘何ぞ敢へて死せん。女音汝。○後謂相失在後。何敢死、謂不赴鬭而必死也。胡氏曰先王之制、民生於三。事之如一、惟其所在、則致死焉。況顏淵之於孔子、恩義兼盡。又非他人之爲師弟子者而已。卽夫子不幸而遇難、囘必捐生以赴之矣。捐生以赴之、幸而不死。則必上告天子、下告方伯、請討以復讐。不但已也。夫子而在、則囘何爲而不愛其死、以犯匡人之鋒乎。女rǔは音汝。○後は、相失ひて後に在るを謂ふ。何ぞ敢へて死せんは、鬭いに赴き必ず死せずを謂ふ。胡氏が曰く、先王の制、民三つに生ず。之に事ること一の如くし、惟其の在す所、則ち死を致す。況や顏淵の孔子に於る、恩義兼ね盡く。又他人の師弟子爲る者のみに非ず。卽ち夫子不幸にして難に遇はば、囘必ず生を捐（す）て以て之に赴かん。生を捐（す）てること以て之に赴き、幸にして死せずんば、則ち必ず上天子に告げ、下方伯に告げ、討を請ひて以て讐を復せん。但に已（や）まず。夫子而るに在せば、則ち囘何爲れぞ其の死を愛せずして、以て匡人の鋒を犯さんや。  
■何晏は、「孔安国曰く、孔子と相ひ失すを言ふ、故に後に在す」、「包氏曰く、夫子在（ま）すを言ふ、己（おのれ）敢へて死す所無し」を引いた。■皇侃は、「猶是前に匡人に誤りて圍まる。時に顏淵と孔子倶に匡に圍まる。孔子先に得て出で還りて家に至る。而して顏淵後に乃ち得て出でて還り至る。―　圍中に相ひ失す」、「淵、後に至る。而して孔子云はく。汝還らず。我、汝當に匡難中に死すがごとしと言へり」、「顏淵の答。其れ有以（有道理）なり。夫れ聖賢が影響は、天降る時雨の如し。山澤必ず先に出雲を為す。孔子既に世に在す。則ち顏回が理、得て死なず。死せば則ち孔道は便ち絶つ。故に、淵死して孔云はく、天予を喪（ほろぼ）せりと。庾翼（ゆよく、305～345年、東晋武将、書家「王羲之と並ぶ人気」）云く、顏子未だ能く窮理の妙を盡さず。妙、盡さざる有れば、則ち以て險津を涉（わた）る可からず。理、未だ窮めざる有れば、則ち以て路に冒屯す可からず。故に、賢、聖に遭はずんば、運否（運の有無）則ち必ず隱る。聖、賢に値はずんば、微言、顯れず。是は以夫子匡を畏るに因りて問を發す。顏子其の旨を體して仰酬（返答）す。入室と稱し指南と為す。門徒を啓き以て出ず處。豈に聖賢の誠言に非ずんば互相に與（くみ）し予を起すこと為す者ならんや。―　李充（りじゅう、323～388年、東晋、著「晋元帝書目」）が云く。聖に虛慮の悔無し。賢に失理の患無し。而して斯言何ぞ興（おこ）さんか。將に世道交喪（世が道を喪ひ、道が世を喪ふ）を以て利義相蒙（利が義を蒙し、義が利を蒙す）す。或は名に殉じて以て輕死す。或は利に昧（くら）み以て生を苟（むさぼ）る。生をるは理存すに非ず。輕死は節を明らかにすに非ず。故に、顏子の死を發す。對ふに死生の命を定むを以てす」とした。■邢昺は、「此の章、仁者必ず勇有るを言ふ」、「言ふは、孔子、匡に畏る時、顏回と相ひ失す。既に免れ、而して回後に在り、方に至る」、「孔子、顏淵に謂ひて曰はく、“吾が女を以て死に致ると為すは匡人との鬥なり”」、「言ふは、夫子、危難に陷るが若き、則ち回は必ずや死に致る。今夫子在す、已則ち敢へて死す所無し。敢へて死に致らずを言ふ」。■司馬遷、史記、孔子世家によれば、孔子一行は、匡の門でかつて匡に悪を為した陽虎と間違われて、拘束をされ、顔回はそれに遅れて着いたようであった。孔子一行は五日拘束され、弟子は孔子が陽虎として処刑されるのではないかと恐れた。孔子は弟子を衛の甯武子（ねいぶし）の臣として難を逃れたという。衛人であった子貢の機転であったかもしれない。この時、孔子が、「文王、既に沒す。文、ここに在らざるか。天の將にこの文を喪（ほろぼ）さば、後に死す者この文に與（あづ）かるを得ざる。天の未だこの文を喪さざるを、匡の人、其れ予を如何とす」と述べたとされる。敢死とは決死のこと。顔回は匡に着いてその事態を聞き、決死の覚悟で疑いを晴らす方法を考えたことであろう。解放されたと聞き胸をなで下ろした。孔子が生きていると分かれば、何敢死。生きて再会すべく後を追った。  
  
○　季子然問ふ、仲由･冉求を、大臣と謂ふ可きか。與平聲。○子然季氏子弟。自多其家得臣二子。故問之。與yúは平聲。○子然は季氏が子弟。自ら其の家に二子を臣とするこを得ることを多とす。故に之を問ふ。  
■何晏は、「孔安国曰く、季子然は、季氏の子弟。自ら此二子を臣とすること得るを多とす。故にこれを問ふ」を引いた。■皇侃は、「季子然は季氏家の子弟なり。時に仲由、冉求季氏家に仕ふ。季子然自ら己が家を誇りて能く此の二賢を得て臣と為す。故に、孔子に問ひて以て此の二人大臣と謂ふ可きや不（いな）を謂ふ」とした。■邢昺は、「此の章、臣と為し君に事る道を明らかにす」、「季子然は季氏が子弟なり。自ら臣に此の二子を得ることを多とす。故に、夫子に問ひて曰く、“仲由、冉求が才、能く政を為す。以てこれを大臣と謂ふ可きか？”疑ひて未だ定まらず、故に “か？”と云ふ」とした。  
　子の曰はく、吾子を以て異なるを問ふと爲す。曾（すなは）ち由と求と問ふ。異非常也。曾猶乃也。輕二子、以抑季然也。異は常に非ざる。曾は猶乃のごとし。二子を輕んじて、以て季然を抑ふ。  
■何晏は、「孔安国曰く、謂へらく子異事を問ふのみ。則ち此の二人之れ問ふ。安ぞ大と為すに足るか？」を引いた。■皇侃は、「此れ答に因りてこれを拒む。子は子然を指す。言ふは子今尚とする所是れ異事なり。是異事の問とする所以は、由、求は大臣に非ずして汝大臣と謂ふ可きと云ふ。故に、汝異事の問を為すと謂ふ」、「此れ是異問を舉ぐ。曾は猶則のごとし。汝問ふ所以是れ異と言ふは、則ち由と求とを問ふ。是異問なり。―　汝問ふ所異事の問と為すを謂ふ。―　前釋の如し」とした。■邢昺は、「此れ孔子、其の自ら多とすを抑ふ。曾は則なり。吾、子を以て異事を問ふと為すのみ。則ち此の二人が問は、安んぞ多大に足るや？問ふ所小なるを言ふ」とした。  
　所謂大臣とは、道を以て君に事へ、不可なれば則ち止む。以道事君、不從君之欲。不可則止者、必行己之志。道を以て君に事るは、君の欲に從はず。不可なれば則ち止むは、必ず己が志を行ふ。■皇侃は、「此れ大臣の事明らかにす。道を以て君に事る。君に惡名有れば必ず諫むを謂ふ。不可ならば則ち止む。三諫して從はずんば則ち境を越へて去る者を謂ふ」とした。■邢昺は、「此れ孔子、更に子然が為に大臣の體を陳說す。言ふは、これを大臣と謂ふ可き所は、正道を以て君に事（つかふまつ）り、君が若し已が道を用ひずんば、則ち當に退止するがごとし」とした。  
　今由と求とは、具臣と謂ふ可し。具臣謂備臣數而已。具臣は、臣の數に備ふるのみを謂う。  
■何晏は、「孔安国曰く、言ふは臣の數に備（そなは）るのみ」を引いた。■皇侃は、「言ふは、今、由、求の二人、亦、諫めず。諫め從はず則ち亦去らずが若し。此れ大臣と為すと名づく可らず。乃ち備具の臣と為すと名づく可きのみ。―　繆協、中正を稱して曰く、假言（仮に）二子が諫を盡すこと能はざるとする所以は、以て季氏に說くに、其の人貴と知ると雖も而るに其の言を敬すこと能はず」。■邢昺は、「既に大臣の體を陳（の）べ、乃ち二子が大臣に非ずと言く。具は備なり。今、二子は季氏に臣し、季氏は道ならずして匡し救ふこと能はず。又、退止せず。唯に備臣に數ふと謂ふ可きのみ。これを大臣と謂ふ可からず」とした。  
　曰く、然らば則ち之に從はん者か。與平聲。○意二子旣非大臣、則從季氏之所爲而已。與yúは平聲。○意ふに、二子旣に大臣に非ずんば、則ち季氏のする所に從はんのみ。  
■何晏は、「孔安国曰く、臣と為して皆當に君の欲する所に從ふがごときやと問ふ」を引いた。■皇侃は、「子然、孔子の二人を大臣と為さずと云ふを聞き、故に、更に云ふ。既に道を以て及ばずんば、則ち止まざる可らず。若し此の如きは、其の君、惡事有り、二人皆君に從ひてこれを為すこと不（なき）か」。■邢昺は、「子然、既に孔子の二子が大臣に非ずと言ふを聞く。故に又、問ひて曰く、然らば則ち二子を臣と為し、皆當に君が欲す所に從ふごときや」とした。  
　子の曰はく、父と君とを弑せんには、亦從はず。言二子雖不足於大臣之道、然君臣之義、則聞之熟矣。弑逆大故、必不從之。蓋深許二子以死難不可奪之節、而又以陰折季氏不臣之心也。○尹氏曰、季氏專權僭竊。二子仕其家而不能正也。知其不可而不能止也。可謂具臣矣。是時季氏已有無君之心。故自多其得人、意其可使從己也。故曰、弑父與君、亦不從也。其庶乎二子可免矣。言ふは、二子大臣の道に足らずと雖も、然れども君臣の義は、則ち之を聞くこと熟す。弑逆大故、必ず之に從はず。蓋し深く二子に許すに難に死し、奪う可からず節を以てし、又以て陰に季氏が不臣の心を折（くじ）く。○尹氏が曰く、季氏權を專らにし僭竊す（せんせつ、身分を越へて位を盗む）。二子其の家に仕へて正すこと能はず。其の不可を知りて止むること能はず。具臣と謂ふ可し。是の時季氏已に君を無みする心有り。故に自ら其の人を得るを多とす。意へらく、其れ己に從はしむ可きと。故に曰はく、父と君とを弑すれば、亦從はず。其れ二子免る可きに庶かしか。  
■何晏は、「孔安国曰く、二子其の主に從ふと雖も、亦、大逆を為すに與（くみ）せず」を引いた。■皇侃は、「答へて言く、諫めず止まずと雖も、若し君に上を弒す事有れば、則ち二人は、亦、從はざる所なり。―　孫綽云く、二子は皆て政事に良きなり。而るに具臣の流を出でず。免る所は唯に弒の事。其の罪、亦、豈に少きかな。夫れ抑揚の教、由らざるか理。將に以て深く子然に激し、以て季氏の責重きなり」とした。■邢昺は、「孔子、更に為に二子の行を說く。言ふは、二子其の主に從ふと雖も、其の主父と君とを弑す若きは、此を大逆と為し、亦、與（くみ）せず」とした。■左伝によれば、仲由が季氏の宰となったのは、定公18（BC498）年、冉求が季氏の宰としてみえるのは哀公11（BC484）年のこと。仲由が季氏の宰となったのは45歳頃、当時冉求は25歳頃、冉求が季氏の宰となったのは39歳頃。冉求の働きでこの年孔子は魯に帰国している。季氏第十六の冒頭にも、冉有と季路が季氏に仕へているとみえるが、この二人が同時に宰として仕へていることは想定しづらい。また、冉有が季氏の宰となるのは、季康子の時であり、それならば、季子然は季康子と同じ時を生きていることになるが、判然としない。  
  
○　子路、子羔（しこう）をして費の宰爲らしむ。子路爲季氏宰而擧之也。子路季氏が宰と爲りて、而して之を擧ぐ。  
■皇侃は、「費は季氏が采邑なり。季氏が邑宰叛く。而して子路、子羔をして季氏の邑宰と為さむと欲（す）」。■邢昺は、「此の章人に學を勉む」、「子路は季氏が臣、故に、子羔を舉げて任じ、季氏が費邑の宰に為さしむ」。■子羔は子路より21歳少（わか）い。  
　子の曰はく、夫（か）の人の子を賊（そこな）ふ。夫音扶。下同。○賊害也。言子羔質美而未學。遽使治民、適以害之。夫fúは音扶。下も同じ。○賊は害なり。言ふは、子羔質美にして未だ學びず。遽（にはか）に民を治めしめば、適（まさ）に以て之を害す。  
■何晏は、「包氏曰く、子羔が學未だ熟習せず、而して政を為さしむは、賊害する所以」を引いた。■皇侃は、「賊は猶害なり。夫人之子は子羔を指す。孔子、子羔が習學未だ習熟せずを言ふ。其に政を為さしむが如きは、則ち必ず乖僻（かいへき、偏屈）為（す）。乖僻せば則ち罪を為し累及ぶ所。故に夫人之子を賊ふと云ふ。―　張憑云く、季氏は臣せず。由は正すこと能はず。而るに子羔をして其に邑宰に為す。道を直（ただ）して人に事る。焉ぞ往、弊に致らざる。道を枉（ま）げて人に事る。亦、夫人之子を賊はざるか」とした。■邢昺は、「賊は害なり。夫人之子は子羔を指す。孔子が意、以為（おも）へらく、子羔が學未だ熟習せずして政を為さしめば、必ず其の身に累し、賊害を為す所以なり」とした。  
　子路曰く、民人有り、社稷有り。何ぞ必ずしも書を讀みて、然して後に學とせん。言治民事神、皆所以爲學。言ふは、民を治め神に事るは、皆學とする所以なり。  
■何晏は、「孔安国曰く、言ふは、是に於て民を治め神に事る、而して之を習ふ、亦學なり」を引いた。■皇侃は、「子路が云く。既に邑に民人社稷有り。今、其の宰と為す。則ち是民を治め神に事るを習ふ。此れ即ち是學。亦、何ぞ必ず讀書に在る。然る後、方に學を為すと謂はんか」とした。■邢昺は、「子路、辯じて孔子に答ふ。言ふは、費邑に人民有り、焉んぞして之を治めん。社稷の神有り、焉んぞしてこれに事らん。民を治め神に事る、是にこれを習ふ、是亦、學なり。何ぞ必ず讀書須べしや、然る後乃ち學を為すと謂ふなり」とした。  
　子の曰はく、是の故に夫の佞者（ねいじゃ）を惡（にく）む。惡去聲。○治民事神、固學者事。然必學之已成、然後可仕以行其學。若初未嘗學、而使之卽仕以爲學、其不至於慢神而虐民者幾希矣。子路之言、非其本意。但理屈詞窮、而取辨於口、以禦人耳。故夫子不斥其非、而特惡其佞也。○范氏曰古者學而後入政。未聞以政學者也。蓋道之本在於脩身、而後及於治人。其說具於方册。讀而知之、然後能行。何可以不讀書也。子路乃欲使子羔以政爲學、失先後本末之序矣。不知其過、而以口給禦人。故夫子惡其佞也。惡wùは去聲。○民を治め神に事るは、固より學者の事なり。然れども必ず之を學ぶこと已に成り、然して後に仕へて、以て其の學を行ふ可し。若し、初めより未だ嘗て學ばず、而して之をして卽ち仕へて以て學と為さしめば、其れ神を慢（おろそかに）し民を虐（しいた）ぐに至らざる者は、幾（ほとん）ど希（まれ）なり。子路が言、其の本意に非ず。但に、理屈（くつ）し詞（ことば）窮（きゅう）して、辨を口に取りて、以て人に禦（あた）るのみ。故に夫子其の非を斥（しりぞけ）ず、特（ただ）其の佞を惡む。○范氏が曰く、古は學びて後に政に入る。未だ政を以て學ぶ者を聞かず。蓋し道の本は身を脩むに在り、而る後に人を治むに及ぶ。其の說方册に具はれり。讀みて之を知り、然る後に能く行ふ。何ぞ以て書を讀まざる可し。子路乃ち子羔に政を以て學をせしめんと欲し、先後本末の序を失す。其の過を知らずして、口給を以て人に禦れり。故に夫子其の佞を惡む。  
■何晏は、「孔安国曰く、其の口を以て給應して、已が非を遂（とげ）て窮するを知らざるを疾む」を引いた。■皇侃は、「孔子、此の語を以て子路を罵る。佞は口才なり。我言ふは、子羔が學未だ習熟せず。これをして政を為さしむを欲せざる所以。而るに汝仍（なほ）云ふ、民神有り、亦、是學、何ぞ必ず讀書す、と。此れ是、佞辨の辭。故に、古人これを惡む所以なり。―　繆協云く、子路、以て子羔、學藝を為し仕る可しと。而るに孔子、猶不可と曰ふは、愈（いよいよ）精（くは）しく愈究せしめんと欲す。而るに時に佞才を以て世を惑すこと有り。位を竊（ぬす）み名を要（もと）む。交はるに道を以てせず。仕るに學に由らず。これを以て牧を宰す。徒に民人社稷有り。之と子羔を比（くら）ぶは則ち長短相形す（比較にならない）。子路茲（ここ）を舉げ以て對ふは、深く當時に疾（や）む所以。これを美（ほ）むに非ず。夫子、其の來る旨を善くす。故に、是故に夫の佞者を惡むと曰く。此れ乃ち時を斥く。豈に由を譏らむか」とした。■邢昺は、「言ふは、人、夫の佞者を憎惡す所以。祇（ただ）に口才捷給（しょうきゅう、 口才敏捷，對答如流）を為す。文過飾にして故非らず。今、子路、口給を以て應ず、已が非を遂げて已を窮すを知らず。是故に、人夫の佞者を惡むと致す」とした。■子路が季氏の宰となった時、孔子は定公の君権を回復するために、費の武装解除に取り組んだ。子路は、その難業を行ふに、少（わか）い子羔であるが、自分の意を呈して動く胆力ある若者と見込み、その足らざる所は自分で補ふ覚悟あって抜擢したのであろう。顔回にできる仕事ではない。これを、学を犯す佞煮（子路）の口才捷給とするは、理解に苦しむ。此奴め、まあ、口達者でにくたらしいことよ、くらいのことではないか。   
  
○　子路･曾皙･冉有･公西華、侍坐す。坐才臥反。○皙曾參父、名點。坐zuòは才cái臥wòの反（音が合はない）。○皙は曾參の父、名は點。  
■何晏は、「孔安国曰く、曾皙は曾參の父、名は點」を引いた。■皇侃は、「此の四弟子、孔子に侍りて坐す」とした。■邢昺は、「此の章、孔子乘間（機会を利用する）し、四弟子侍して坐す。因りて各（おのおの）をして其の誌（志）を言はしむ。以て其の器能を觀る」、「時に孔子坐し、四子側に侍る、亦、皆坐す」とした。  
　子の曰はく、吾が一日爾（なんぢ）より長ぜるを以て、吾を以てすること毋（な）かれ。長上聲。○言我雖年少長於女、然女勿以我長而難言。蓋誘之盡言、以觀其志。而聖人和氣謙德、於此亦可見矣。長zhǎngは上聲。○言ふは、我年少（すこ）しく女（なんぢ）に長ずと雖も、然れども女我が長ぜるを以て言ひ難（な）へること勿かれ。蓋し之を誘（いざな）ひて言を盡して、以て其の志を觀る。而して聖人の和氣謙德、此に亦見る可し。  
■何晏は、「孔安国曰く、言ふは我汝に問ふ。汝我が長ずを以て、故に對へ難きこと無し」を引いた。■皇侃は、「孔子將に四子に志を言はしめんとす。故に、先ず此の言を説きて以てこれを勸引（勧勉誘導）す。爾は汝なり。言ふは、吾は今汝より一日年齒（年齢）長大のみ。汝等は以て吾が年長を言ひて敢へて己が志を言はざること無し」とした。■邢昺は、「孔子將に問を發さむとす。先ず此の言を以てこれを誘掖（誘導）す。言ふは、女（なんぢ）等吾に侍す、吾が女より年長を以て、謙（へりくだ）りて少言す。故に一日と云ふ。今我女に問ふ、女等、吾が長を以て其の對（こたへ）を憚難する（ためらふ）こと毋（なか）れ」とした。  
　居れば則ち曰く、吾を知らず。如し或ひは爾を知らば、則ち何を以てせんや。言女平居、則言人不知我。如或有人知女、則女將何以爲用也。言ふは、女平居には、則ち言人我を知らずと。如し人の女を知ること有る或らば、則ち女將に何を以てか用ふを爲さんことをす。  
■何晏は、「孔安国曰く、汝常居に云ふ、人己を知らず」、「孔安国曰く、如し汝を用ふ者有れば、則ち何く以てが治を為さんや」。■皇侃は、「居は弟子が常居する時を謂ふ。吾が弟子自ら謂ふ。言ふは、汝等常居の日。則ち皆自ら吾をる者無しと云ふ」、「言ふは、如し或る人有りて、汝等を知りて用ひんとす。汝等則ち志、各、何んぞ治を為さむとす」とした。■邢昺は、「此れ辭を問ふなり。言ふは、女（なんぢ）常居し則ち已に才能有りて、人我を知らずと云ふ。如し人有りて女を知り、將にこれ（女）を用ひんとせば、則ち女將に何を以てか治を為すや」とした。  
　子路、率爾として對へて曰く、千乘の國、大國の閒に攝して、之に加ふるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てせん。由之を爲めて、三年に及ぶに比（をよ）びて、勇有りて且つ方（むかふ）ことを知らしむ可し。夫子之を哂（わら）ふ。乘去聲。饑音機。饉音僅。比必二反、下同。哂詩忍反。○率爾、輕遽之貌。攝管束也。二千五百人爲師、五百人爲旅。因仍也。穀不熟曰饑、菜不熟曰饉。方向也。謂向義也。民向義、則能親其上、死其長矣。哂微笑也。乘shèngは去聲。饑jīは音機。饉jǐnは音僅。比bìは必bì 二èrの反（音声が合はない）、下も同じ。哂shěnは詩shī忍rěnの反。○率爾は、輕遽の貌。攝は管束（監督）なり。二千五百人を師と爲し、五百人を旅と爲す。因は仍なり。穀熟さずを饑と曰い、菜熟さずを饉と曰ふ。方は向なり。義に向かふを謂ふ。民義に向かへば、則ち能く其の上に親し、其の長に死す。哂は微笑なり。  
■何晏は、「率爾、三人に先じて對ふ」とし、「包氏曰く、攝は迫なり。大國の間に迫る」、「方は義方なり」、「馬融曰く、哂は笑なり」を引いた。■皇侃は、「禮（礼記）に、君子に侍坐し、君子端（話題）を更（あらた）めて問はば則ち起（た）ちて對ふ（曲禮上）。及ち顧望（熟考）して對ふべし。而るに子路起たず、又、顧望せず。故に卒爾として對ふと云ふ。卒爾は禮儀無きを謂ふ」、「此れ子路志を言ふ。千乘は大國なり。攝は迫なり。大國又千乘より大なるもの。言ふは、己願はくば大國を得て治めむ。而して此の大國又他の大國の閒に迫近すること有り。所謂他の大國、己が國を中に挾む」、「言ふは、他の大國、師旅兵刃を以て己が治む所の國に陵（侵犯）を加ふ」、「穀乏しきを飢とす。菜乏しきを饉とす。言ふは、己が國既に四方大國の兵陵を被る。又、自國中は大荒餓に因る」、「猶治を為す。言ふは、己が國以て他兵が加ふ所と為す。又、荒饑の日久し。由、願くば此の國を得てこれを治めむ」、「比は至なり。言ふは、由、此の國を治め、三年に至りて、民人をして皆勇健せしめ、又皆義方に知識せしむ」、「哂は笑なり。孔子、子路が言を聞きてこれを笑ふ。―　齒本（歯根）を哂（しん）と曰ふ。大笑は口開き則ち哂見す。故に、哂は笑を為す者を謂ふ」。■邢昺は、「子路が性は剛、故に率爾し三人に先んじて對ふ」、「此れ子路が誌とする所。千乘の國は、公侯が六國なり。攝は迫なり。穀熟さずを饑とす。蔬（蔬菜）熟さずを饉とす。方は義方なり。言ふは、若し公侯が國有りて、大國の間に迫られ、又、これに加ふに、師旅を以て侵伐され、複（かさ）ねて、これに因りて饑饉を以て民困せるも、由やこれを治む。三年に比び至りて以來、其の民をして勇敢有りて且つ義方を知らしむ可し」、「哂は笑なり。夫子、これを笑ふ」。  
　求、爾は何如。對へて曰く、方六七十、如しくは五六十、求之を爲めば、三年に及ぶに比びて、民を足らしむ可し。其の禮樂の如きは、以て君子を俟つ。求爾如何、孔子問也。下放此。方六七十里、小國也。如猶或也。五六十里、則又小矣。足富足也。俟君子、言非己所能。冉有謙退、又以子路見哂、故其詞益遜。求爾如何は、孔子の問なり。下も此に放（なら）へ。方六七十里は小國なり。如は猶或のごとし。五六十里は則ち又小なり。足は富足なり。君子を俟つは、己の能くする所に非ざるを言ふ。冉有謙退は、又子路の哂はるを以て、故に其の詞益々遜（へりくだ）る。  
■何晏は、「求が性謙退。言ふは、方六七十、如（もし）くは五六十里の小國を得てこれを治めむと欲（す）のみ」、「孔安国曰く、求自ら云く、能く民を足すのみ。衣食足るを謂ふ。禮樂の化の若きは、當に以て君子を待つ。謙なり」。■皇侃は、「由を哂ふこと既に竟（をは）る。而して餘三人は無言。故に孔子、又、冉求に汝が志何如を問ふ」、「求、答へて志を言ふ。言ふは、願はくば國地方六七十里なるを得て、己これを治む」、「意は又、自ら言ふ所方六七十を嫌向（気兼ね）し大とす。故に、又、退きて方五六十里が如きと言ふ。―　一に云く。六七十を願ふは、五六十を大とする者の如し。己其の小を得んと欲（す）」、「言ふは、己願はくば此の小國を治め、若し三年に至らば、則ち能く民人をして足らしむ」、「又謙るなり。言ふは、己乃ち能く民を足らしむのみ。民に教ふ禮樂の若きは、則ち己能はざる所。故に、君子を俟ちてこれを為すを請ふ」とした。■邢昺は、「子路既に對ふ。三子無言。故に孔子複（また）曆（治/いさをし）これを問ふ。冉求、爾が誌何如」、「此れ冉求が誌なり。俟は待なり。求が性謙退、言ふは、方六七十を得んと欲（す）は五十裏の小國、これを治むが如きのみ。求や此の小國を治め、三年に及ぶに比びて以來、民に衣食足らしむ。禮樂が化の若きは、當に以て君子を待つ。此れ謙辭なり」とした。  
　赤、爾は何如。對へて曰く、之を能くすと曰ふには非ず、願はくは學ばん。宗廟の事、如しくは會同に端章甫して、願はくば小相爲らん。相去聲。○公西華、志於禮學之事。嫌以君子自居。故將言己志、而先爲遜辭。言未能而願學也。宗廟之事、謂祭祀。諸侯時見曰會、衆頫曰同。端玄端服。章甫禮冠。相贊君之禮者。言小亦謙辭。相xiàngは去聲。○公西華、禮學の事に志す。君子を以て自居を嫌ふ。故に將に己が志を言はんとして、先ず遜辭を爲す。言ふは、未だ能くせず、願はくは學ばん。宗廟の事は、祭祀を謂ふ。諸侯時見を會と曰ふ。衆頫（俯）を同と曰ふ。端は玄端服。章甫は禮冠。相は君の禮を贊（たす）くる者。小と言ふは、亦、謙辭なり。  
■何晏は、「鄭玄曰く、我自ら能すと言ふに非ず。願くば學びてこれを為さん。宗廟が事は、祭祀を謂ふ。諸侯時に見るを會と曰ふ。殷（さか）んに見るを同と曰ふ。端は玄端なり。玄端を衣（き）て章甫を冠す。諸侯日に朝に視る服。小相は、君が禮を相（たす）くを謂ふ」を引いた。■皇侃は、「求が答已に竟（をは）る。故に更に公西華に問ふ」、「赤が答なり。非曰は猶非謂のごとし。答へて曰く。己自ら能くすと謂ふに非ず。願はくば此に從ひ而る後に學びてこれを為む」、「此れ以下竝べて言ふは、學ぶ所の事を願ふ。宗廟の事は人君祭祀の事を謂ふ。會同の如きは諸侯會同の事有る時なり」、「端は玄端の服なり。章甫は章甫の冠を謂ふ。言ふは、願くば君に祭祀及び會同の事有れば、而して己は玄端服章甫之冠なり、小相と為りて君が禮を相（たす）く。―　四時及禘祫（三年一祫、五年一禘）皆是也。―　周禮六服（侯･甸･男･采･衛・蛮）各服に隨ひて來る。是は正朝有數（「春見を朝、夏見を宗、秋見を覲(きん)、冬見を遇、時見を会、殷見を同と曰ふ」）なり。而して時見を會と曰ふ。此れ常期無し。諸侯に不庭服者（王庭に朝さぬ者、王に服さぬ者）有れば、王將に征討の事有り。則ち朝竟（境）に因り、王命じて國外に壇を為し諸侯を合す。而して禁を發し、亦、其の方に隨ふ。若し東方不服ならば、則ち命じて東方の諸侯と共にこれを征す。此れ是の時見を會と曰ふ。又、王十二年に一巡狩す。若し王に事故有らば、則ち六服の諸侯竝びて京師に來る。王に朝し法を受く、此れ是の殷覜（ちょう、眺と同じ）を同と曰ふ。而して鄭玄、殷覜を同と曰くを注して云ふは、周禮に又時聘を問と曰ふ、殷覜を視と曰ふ、竝びて是れ諸侯が臣を遣はして京師に來ると有る。王に事故有らば、諸侯自ら來るを得ず。而して臣を遣はし來りて王に聘す（進物を携え訪問）。此れ亦、定時無し。是の時聘を問と曰ふ。又、元年六服唯だ侯服獨り來朝す。京師人少し。故に、諸侯竝びて臣を遣はし京師に來りて王を視る。是の殷覜を視と曰ふ。鄭玄、殷見を同と曰くを云ふは、廣く覜見の言通ず。―　章甫は殷冠なり。―　然り、周家諸侯を視朝之服と日ふ。服は緇布衣（衣「上衣」は黒）素積裳（裳は無色のヒダのあるスカート）、冠は委貌（玄冠）。此れ玄端を視朝と日くと云ふ。容（立ち振る舞い）是周末に禮亂るものなり。―　宗廟及び會同。皆て是れ君事。而して己願はくばこれを相くのみ」とした。■邢昺は、「又、公西華に問ふ」、「此れ赤の誌なり。曰は言なり。我、自らこれを能くすと言ふに非ず。原（ねが）はくば學びて為さむ。宗廟祭祀の事、如し諸侯の會同有りて、諸侯が衣玄端、冠章甫に及べば、視朝の時を日ふが、已原はくば其の小と為りて君が禮を相けむ」とした。  
　點、爾は何如。瑟（しつ）を鼓（ひ）くこと希（や）み、鏗爾（こうじ）として瑟を舍（お）きて作（た）ち、對へて曰く、三子者の撰（そなへ）に異る。子の曰はく、何ぞ傷（いた）まんや。亦、各々其の志を言ふ。曰く、莫春には、春服旣に成る。冠者五六人、童子六七人、沂（き）に浴し、舞雩（ぶう）に風して、詠じて歸らん。夫子喟然として歎じて曰く、吾は點に與（くみ）せん。鏗苦耕反。舍上聲。撰士免反。莫冠竝去聲。沂漁依反。雩音于。○四子侍坐、以齒爲序、則點當次對。以方鼓瑟、故夫子先問求赤、而後及點也。希閒歇也。作起也。撰具也。莫春和煦之時。春服單袷之衣。浴盥濯也。今上已祓除、是也。沂水名、在魯城南。地志以爲有溫泉焉。理或然也。風乘涼也。舞雩祭天禱雨之處、有壇墠樹木也。詠歌也。曾點之學、蓋有以見夫人欲盡處、天理流行、隨處充滿、無少欠闕。故其動靜之際、從容如此。而其言志、則又不過卽其所居之位、樂其日用之常。初無舍己爲人之意。而其胷次悠然、直與天地萬物、上下同流、各得其所之妙、隱然自見於言外。視三子之規規於事爲之末者、其氣象不侔矣。故夫子歎息而深許之、而門人記其本末、獨加詳焉。蓋亦有以識此矣。鏗kēngは苦kǔ耕gēngの反。舍shěは上聲。撰zhuànは士shì免miǎnの反（音と声が合はない）。莫mù･冠guànは竝去聲。沂yíは漁yú依yīの反（声が合はない）。雩yúは音于。○四子侍坐す。齒（よはひ）を以て序と爲せば、則ち點は當に次に對ふべし。方に瑟を鼓くを以て、故に夫子先ず求・赤に問ひて、而して後に點に及ぶ。希は閒歇（中断）なり。作は起なり。撰は具なり。莫春は和煦（わく、春の日ざしの暖かく穏やかなこと）の時。春服は單（ひとえ）袷（あはせ）の衣（軽装）。浴は盥濯（かんたく、洗滌）なり。今の上已の祓除（ふつじょ、災いを除き、けがれを祓うこと）、是れなり。沂は水（川）の名、魯の城南に在り。地志以て溫泉有りと爲す。理或は然らん。風は、涼に乘する。舞雩は、天を祭り、雨を禱（いの）る處、壇墠（盛り土をし、平らにする）樹木有り。詠は歌なり。曾點が學、蓋し以て夫の人欲盡きる處、天理流行し、處に隨いて充滿し、少しの欠闕（けっけつ）無きを見ること有り。故に其の動靜の際、從容此の如し。而して其の志を言ふこと、則ち又其の居る所の位に卽きて、其の日用の常を樂しむに過ぎず。初めより己を舍て人の爲にする意無し。而して其の胷次（胸中）悠然として、直に天地萬物と、上下流れを同じくす。各々其の所を得るの妙、隱然として自ら言外に見（あら）はる。三子の事爲の末に規規（杓子定規）たる者に視（みくら）ぶれば、其の氣象侔（ひと）しからず。故に夫子歎息して深く之を許す。而して門人其の本末を記すこと、獨（ひたす）ら詳すことを加ふ。蓋し亦以て此を識ること有り。  
■何晏は、「孔安国曰く、對（こた）ふ所以を思ふ。故に音希（や）む。」、「孔安国曰く、瑟を置きて起（たち）て對ふ。撰は具なり。政を為す具（そなへ）。鏗は瑟を投ず聲」、「孔安国曰く、各々己が志を言ふ、義に於いて傷（やぶ）ること無し」、「包氏曰く、莫春は季春三月なり。春服既に成るは、單袷を衣る時。我冠者五六人、童子六七人を得て、沂水の上に浴すや、舞雩の下に風涼して、先王が道を歌詠して、夫子が門に歸るを欲す」、「周生烈曰く、點、獨り時を知るを善（よみ）す」を引いた。■皇侃は、「赤が答既に竟る。又、曾皙に問ふ」、「鼓は猶彈のごとし。希は疏なり。點瑟を彈くを政す。既に孔子が問を得て、將に以て對ふ所の言思ふ。故に瑟を彈く手遲れて聲希む」、「鏗は瑟を投ず聲なり。舍は投なり。作は起なり。點、對ふ所の辭を思ふ。將に仰ぎて答へむと欲（す）。故に、瑟を投じて起（た）ちて對ふ。起ちて對ふは禮なり。點獨り起ちて云ふ。則ち求赤起ちて知る可し」、「撰は具なり。點は起ちて對へて云ふ。己が志す所は、路求赤三子の志に具ふ所に異る。具ふ所即ち千乘の國等是なり」、「孔子、點に志異るを聞く。故に、人生志す所各異ると云ふ。亦、何ぞ傷むや。汝但に當にこれを言ふべし」、「此れ點志を言ふ。暮春は建辰（北斗七星の柄「建」が「辰」の方角になる「陰暦三月」）夏の三月を謂ふ。年に四時有り。時に三月有り。初月を孟と為（す）。次者を仲と為。後者を季と為。季春は是三月なり。季春と云はずして暮春と云ふは、月末に近し。月末、其の時は已に暖なり。春服成るは、天の時暖にして衣服は單袷（ひとえのあはせ）と成る」、「已に冠す成人を加ふ。五六は趣（おもむろ）に其の數を舉ぐ」、「童子は未だ冠せざるを稱す。又、有未だ冠せざる者六七人なり。或に云く、冠者五六は五六三十人なり。童子六七は六七四十二人なり。四十二に三十を合はせ七十二人と為（す）。孔子が堂に升る者七十二人なり」、「沂は水の名なり。暮春は既に暖。故に、諸の朋友と相ひ隨ひ、沂水に往きて浴す」、「風は風凉なり。舞雩は雨を請ふ壇處なり。雨請ひの祭、これを雩と謂ふ。雩は吁なり。民、雨を得ず。故に吁嗟（うさ、ため息ををつき嘆く）す。祭して巫舞ふ。故に、舞雩を為すと謂ふ。沂水の上に雨を請ふ壇有り。壇上に樹木有り。故に、沂に入り浴して出でて壇に登る。樹下に庇（やど）り、風に逐（したが）ひ凉す。故に、王弼云く、沂水は孔子が宅に近し。舞雩の壇其の上に在り。壇に樹木有り。游は託なり」、「浴竟りて凉罷む。日光既に稍（わずか）に晩（くら）し。是に朋友詠じて先王が道を歌ふ。孔子が門に歸還す」、「孔子、點の願を聞く。是以て喟然として歎ず。既に歎じて云く。吾は點に與す。言ふは、我が志點と同じ。與に同じふす所以は、當時道消へ世亂る。馳せ競ふ者眾（おほ）し。故に諸の弟子皆仕進を以て心と為（す）。唯だ點獨り時變を識る。故に、これに與（くみ）す。故に李充が云く、其の能を善くし道を樂しみ時を知る。逍遙として詠の至に游（あそ）ぶ。夫れ人各に能有り。性各に尚有り。能く其の長所を舍（す）て其の短所を為すは鮮（すくな）し。彼の三子者が云は誠に各其の志を言ふ可し。然るに此れ諸賢既に已に風流に漸染す。道に服し化す。親しく聖師を仰ぐ、これを誨へて倦くこと無し。先王が門豈に政を執る所先にせんや。嗚呼不能を遽（おそ）れ一に鄙願を忘る。而るに暫（にはか）に雅好に同ずかな。知を諒（解）し情は中に從ひ來る。己を假（いつは）る可らず。唯に曾ち生起すること然り獨り對へて徳音を揚ぐ。予の風儀を起す。其の辭は精（純粋）にして遠し。其れ高を指して適（かな）ふ。亹亹（びび、努めて倦くことない）か。固より盛徳の所に同じ。三子が談は茲に陋す（見識が狭い）」とした。■邢昺は、「又、曾皙に問ふ」、「時に曾皙方に瑟を鼓く。師の問を承り、思ふ所以て對へ、故に音希（や）む」、「作は起なり。舍は置なり。鏗は瑟を投ず聲。其の對を得むと思ひ、故に、瑟を置きて起ちて對ふ。其の瑟を投置し聲は鏗然なり」、「撰は具なり。未だ敢へて其の誌を言はず。先に此の辭對へて、已が所誌を言ふ。三子者が陳（の）ぶ所政の具と為すに異（ことな）らむ」、「孔子、曾皙が謙を持し、其の對へ難きを見る。故に、此の言を以てこれを誘ひて曰く、義に於いて何を傷むか。亦、各其の誌を言ふ。其の誌す所に任せて言はしめむと欲（す）」、「此れ曾點が誌とする所。莫春は季春なり。春服既に成り、衣は單袷の時なり。我は二十以上の冠者五六人と十九以下の童子六七人を得て、沂水の上に浴すや、風舞雩の下に涼し、先王が道を歌詠し、而して夫子が門に歸らむと欲（す）」、「喟然は歎ず貌。夫子、其の道を樂しむを聞く。故に喟然として歎じて曰く、吾は點が誌に與す。善きかな、其れ獨り時を知り、而して政を為すを求めず」とした。  
　三子者出づ。曾皙後（おくれ）れたり。曾皙が曰く、夫（か）の三子者が言（こと）何如。子の曰はく、亦各々其の志を言ふのみ。夫音扶。夫fúは音扶。  
■皇侃は、「子路、求、赤が三人孔子と點を見る。故に、已に竝びて先に出で去る」、「在後は未だ去らず」、「皙は既に後に留る。故に、孔子に問ふ。言ふは、向者三子が言ふ所は、其の理は如何」、「孔子答へて言く、三子が言は各（おのおの）同じからずと雖も、然り亦、各是其の心志す所」とした。■邢昺は、「子路、冉有、公西華三子先に出ず。曾皙後（おく）れたり。猶夫子に侍坐す」、「曾皙、後に在りて、夫子に問ひて曰く」、「言ふは、三子は亦各其の誌す所を言ふのみ。是非を別つこと無し」とした。  
　曰く、夫子何ぞ由を哂（わら）ふ。點以子路之志、乃所優爲、而夫子哂之、故請其說。點子路が志を以て乃ち優に爲する所。而して夫子之を哂ふ。故に其の說を請ふ。  
■皇侃は、「點は孔子を呼びて吾子と為（す）。點又云く、若し各親ら是れ志を言ふならば、則ち孔子何ぞ獨り子路を笑ふや。故に、何ぞと云ふ」とした。■邢昺は、「曾皙又、夫子に問ひて曰く、既に三子各其の誌を言ふ。何ぞ獨り仲由を笑ふ」とした。  
　曰はく、國を爲（をさ）むるに禮を以てす。其の言讓らず。是の故に之を哂ふ。夫子蓋許其能、特哂其不遜。夫子蓋し其の能を許し、特（ただ）に其の不遜を哂ふ。  
■何晏は、「包氏曰く、國を為（をさ）むは禮を以てす。禮は讓を貴ぶ。子路が言讓らず。故にこれを笑ふ」。■皇侃は、「答へて子路が由とする所を笑ふ。言ふは、我が子路を笑ふは、其の志を笑ふに非ず。政是其の卒爾にして讓らざる故を笑ふのみ。夫れ國を為むは必ず禮讓に應ずべし。而るに子路は既に國を治むを願ひて、卒爾にして其れ言ふ。謙讓す所無し。故に、これを笑ふのみ」とした。■邢昺は、「此れ夫子、哂ふ意を說かむと為（す）。言ふは、國を為むは禮を以てす。禮は謙讓を貴しとす。子路不讓を言ふ、故に、これを笑ふ」とした。  
　唯々求は則ち邦に非ずや。安んぞ方六七十、如しくは五六十にして、邦に非ざる者を見ん。與平聲。下同。○曾點以冉求亦欲爲國而不見哂、故微問之。而夫子之答無貶詞。蓋し亦これを許す。與yúは平聲。下同じ。○曾點、冉求亦國を爲めんと欲すを以て、哂はれず。故に微（遠回し）に之を問ふ。而して夫子の答、貶詞（ほめことば）無し。蓋し亦之を許す。  
■皇侃は、「孔子、更に證す、我が笑ふは、子路が志を笑ふに非ず。若し、子路に國を為む志有るを笑へば、則ち冉求亦、是國を為むに志す。吾何ぞ獨り笑はざるや。既に求を笑はず。豈に獨り子路を笑ふか。故に唯に求邦に非やと云ふ。與に是邦を言ふ。安ぞ方、六七十如しくは五六十にして邦に非ざる者を見ん。亦、是邦を云ふ」とした。■邢昺は、「此れ夫子又、哂はずを言ふ。其れ子路、諸侯が事を為めむと欲（す）、故に、三子言ふ所を舉げ、明らかに皆て諸侯が事、子路と同じ。其れ讓を言ふ、故に、これを笑はず。徒に其れ子路が讓らずを笑ふのみ」とした。  
　唯々赤は則ち邦に非ずや。宗廟會同、諸侯に非ずして何ぞ。赤之が小爲（た）れば、孰か能く之が大爲らん。此亦曾皙問、而夫子答也。孰能爲之大、言無能出其右者。亦許之之詞。○程子曰古之學者、優柔厭飫、有先後之序。如子路冉有公西赤、言志如此、夫子許之亦以此、自是實事。後之學者好高、如人游心千里之外、然自身卻只在此。又曰孔子與點、蓋與聖人之志同、便是堯舜氣象也。誠異三子者之撰、特行有不掩焉耳。此所謂狂也。子路等所見者小。子路只爲不達爲國以禮道理、是以哂之。若達却便是這氣象也。又曰、三子皆欲得國而治之。故夫子不取。曾點狂者也。未必能爲聖人之事、而能知夫子之志。故曰浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。言樂而得其所也。孔子之志、在於老者安之、朋友信之、少者懷之、使萬物莫不遂其性。曾點知之。故夫子喟然歎曰、吾與點也。又曰曾點漆雕開、已見大意。此も亦曾皙問ひて、夫子答ふる。孰か能く之が大爲らん。言ふは、能く其の右に出る者無し。亦之を許す詞なり。○程子の曰く、古の學者は優柔厭飫（ゆうじゅうえんよ、從容として求索し、深く入りて味はふ）にて、先後の序有り。子路･冉有･公西赤の如きは、志を言ふこと此の如し。夫子之を許すに亦此を以てす。自ら是れ實事。後の學者高きを好む。人の心を千里の外に游ばせるが如し、然るに自身は卻（却、かへり）て只此には在り。又曰く、孔子の點に與（くみ）すは、蓋し聖人の志と同じ。便ち是れ堯舜の氣象なり。誠に三子者の撰に異り、特に行掩はざること有るのみ。此れ所謂狂なり。子路等見る所は小。子路只國を爲むるに禮を以てする道理に達せざる爲に、是を以て之を哂ふ。若し、達却せば（逆に達しておれば）便ち是れ這（こ）の氣象（堯舜の氣象）なり。又曰く、三子は皆國を得て之を治めんと欲す。故に夫子取らず。曾點は狂者なり。未だ必ずしも能く聖人の事を爲ざる。而れども能く夫子の志を知る。故に曰く、沂に浴し、舞雩に風じて、詠じて歸らん。言ふは、樂しみて其の所を得る。孔子の志は、老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懷（なず）くに在り。萬物をして其の性を遂げざること莫からしむ。曾點は之を知る。故に夫子喟然として歎じて曰く、吾は點に與せん。又曰く、曾點･漆雕開、已に大意を見る。

■何晏は、「孔安国曰く、明に皆諸侯の事。子路と同じ。徒に子路の讓らざることを笑ふ」、「孔安国曰く、赤、謙りて小相と言ふのみ。孰れか能く大相を為せん」を引いた。■皇侃は、「又赤を引きて我子路が志を笑はずを證す。赤は宗廟會同を云ふ。會同は即ち是諸侯が事。豈に邦に非ずと曰ふ。而るに我何ぞ獨り笑はざるや。又、笑ふは志を笑ふに非ざるを明らかにす。徒は猶黨輩なり。言ふは、求等言ふ所、皆て是諸侯が事。子路と猶是一黨輩のみ。笑ふは、本是其れ讓らずを笑ふ」、「又因りて赤が謙を許さず。言ふは、赤が才徳云自ら小相為（た）るを願ふ。若し赤を以て小為れば、誰ぞ大に堪（た）ふ者か。赤又是己を明らかにすること有り、これを笑はず。故に、因りてこれを美（ほ）む」とした。■邢昺は、「此れ夫子又言ふ。公西華が才大相為るに堪ふ。今、赤謙りて小相と言ふのみ。若し赤やこれを小相と為さば、更に誰ぞ能く大相と為さむ。○ “孔安国曰、皙、曾參父、名點”を注す。○正義曰く、『史記·弟子傳』に曰く、“曾蒧、音は點、字は皙”是なり。○ “方、義方”を注す。○正義曰く、義は宜なり。方は道なり。能くこれを教へ宜の道に合はすを知らしむを言ふ。『左傳』に曰く、“愛子これを教ふに義方を以てす。”○ “ 鄭曰”至“之禮”を注す。○正義曰く、“宗廟の事は祭祀を謂ふ”と云ふは、禴（やく、夏祭）、祠（し、春祭）、烝（じょう、冬祭）、嚐（しょう、秋祭）及び追享、朝享、禘、祫（四時の間の祀）が類を謂ひ皆て是なり。“諸侯時見曰會。殷頫曰同”と云ふは、『周禮·春官·大宗伯職』が文、但に彼は殷見と作（す）、此は殷頫と作（す）、頫は則ち見なり。鄭玄、注に云く、“此の禮は諸侯を以て王に見ゆに文と為（す）”。時見は、常期無きを言ふ。諸侯に順ひ服さぬ者有れば、王將に征討の事有りて、則ち既に朝覲（諸侯が天子に朝）し、王は國外に壇を為し、諸侯を合し南して事を命ず。『春秋傳』に曰く、“事有れば會す、協せずば而して盟す”是なり。殷は猶眾なり。十二歲、王如し巡守せずんば、則ち六服盡く朝す。朝禮既に畢り、王亦壇を為し、諸侯を合し以て政を命ず。命ず所が政は、王が巡守し殷見せば、四方四時分來(二月；岱宗、五月；南岳、八月；西岳、十一月；北岳)すが如し、歲終りて則ち遍し、是なり。“端玄端也。衣玄端、冠章甫、諸侯日視朝之服”と云ふは、其れ正幅にしてこれを玄色に染むを衣る。故に玄端と曰ふ。『王制』に云ふ“周人、玄衣して老を養ふ”を案ずに、注に云く、“玄衣に素裳”天子が燕服、諸侯が朝服と為（す）。彼玄衣と云ふ、則ち此れ玄端なり。素を以て裳と為が若き、即ち是朝服。此の朝服の素裳は皆て得てこれを玄端と謂ふ。故に此の注は、 “端は玄端”、諸侯の朝服を云ふ。上士は玄を以て裳と為し、中士は黃を以て裳と為し、下士は雜色を以て裳と為すが若し。天子、諸侯は朱を以て裳と為す、則ち皆てこれを玄端と謂ひ、得て名づけず朝服と為（す）。 “小相、相君之禮”と云ふは、『周禮·秋官·司儀職』を案ずに、“九儀の賓客、擯相の禮を掌り、以て儀容、辭令、揖讓の節を詔す”と云ふに、注して云く、“出でて賓に接すを擯と曰ふ、入りて臡禮すを相と曰ふ。”又、曰く、“凡そ諸公は相賓と為し、將に幣を擯交はすに及びて、三たび辭し、車を逆（むか）へ拜辱す。賓車進み答へて拜し、三揖三讓す。門每に止まり一相す”。注に曰く、“相は主君の擯者及び賓の介の為（ため）にす。之を相と謂ふは、外で傳辭すのみ。門に入りて當に禮を以て詔侑（勧告）す。介は紹して命を傳ふ者。君子は其の所で尊して敢へて質せず、敬の至なり。門每に上り一相し、彌（いよいよ）相ひ親す”。是相を相君の禮と謂ふ。『聘禮』に云く、“卿を上擯と為（す）、大夫を承擯と為、士を紹擯と為”。『玉藻』に曰く、“君が門に入るに、介は闑（しきみ、大門中央の短木）を拂ふ、大夫は棖（車止め木柱）と闑の間に中し、上介は棖を拂ふ”。則ち卿を上介と為（し）、大夫を次介と為、士を末介と為（す）。此れ云ふは、原（もと）より小相を為すは、謙。敢へて上擯上介の卿と為さず。原より承擯紹擯次介末介の大夫、士と為すのみ。○ “包曰”より “之門”に至り注す。○正義曰く、 “我欲得冠者五六人，童子六七人”と云ふは、意は其の朋友十餘人を取ること在るのみ。“浴於沂水之上，風涼於舞雩之下”と云ふは、杜預の云く、“魯城の南に沂水有るに自る”、此れ是也。夫れ沂水は蓋縣に出ず、南に下邳（かひ）に至りて泗（水）に入る。雩は、祈雨の祭名。『左傳』に曰く、“龍見（あらは）れて雩す”是なり。鄭玄曰く、“雩は籲（懇請）なり。籲嗟して雨を請ふ”。杜預の曰く、“雩の言は遠し。遠は百穀が為に膏（恵）雨を祈る。童男女をして舞はしむ”。『春官·女巫職』に曰く、“旱暵（かんかん照り）せば則ち舞雩す”。其の處で舞雩を為すを謂ふに因る。舞雩の處には壇墠（平地）樹木有りて、以て休息す可し。故に “風涼於舞雩之下”と云ふ。○ “周曰く、善く點獨り時を知る”を注す。○正義曰く、仲尼、堯、舜を祖述し、文武を憲章すも、生值亂時（丁度乱世に生まれ）而して君は用いず。三子能く時を相（みさだめ）ず、誌は為政に在り。唯だ曾皙獨り能く時を知る。誌は澡身浴德（身心を修養し、純潔清白たらしむ）、詠懷樂道（思いを詩歌にして詠じ道を楽しむ）に在り。故に、夫子これに與（くみ）す」とした。

■筆者思うに、齒本（歯根）を哂（しん）と曰ふ、とあった。にやりと歯を見せた笑い。由は性懲りない奴だなの感覚。結局、礼は眼中にない。師が如何なる苦難にあろうと我は懼れず共に邁進すると表明したがごとき。この気性が彼を死に導いた。求よ、民を礼樂受け入れ可能な状態に導くなど、礼樂に通じた者ですら難しい。お前は勘違いしている。結局お前は季氏を富ませるに過ぎないと求を避難することになった。赤のみ礼楽に熱心であるとした。先進と後進の弟子の対比がある。點に与したのは、夢に周公を見なくなった孔子の心境であろう。自分の生きている間に、自分の道がおこなわれることはないとされた。  
了　2018.01.04